
黄泉ガエリ

川本流華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄泉ガエリ

【Nコード】

N6960C

【作者名】

川本流華

【あらすじ】

殺人事件が連続するたびに、咲は記憶の錯乱を起こす。その原因を知ったとき、哀しみが交差する。

連続殺人

六月の半ば、梅雨に入り今日も一日中雨が降り続いていた。しかし、東京の街は人が途絶えることなく、夜になっても色とりどりの傘が街を埋め尽くしていた。そんな中、

『ドスッ』

鈍い音と共に一人の男性が交差点の真ん中に倒れこんだ。

「どうかしました？」

通りがかった学生が身体を揺すったが、男性は身動き一つせず、眠っているかのように目を閉じて安らかな表情を浮かべていた。何度も身体を揺すってみせると、学生はその男性の胸から何かが流れ出ていることに気がついた。

「うわ、血だ」

学生が後ろに倒れながら声を上げると、

「きゃあー、人殺しよ」

その後ろにいたOL風の女性が悲鳴を上げた。

(間に合わなかった。これで三人目。……時間がない)

白いコートを羽織った少女は息を切らし、ひざに手をついた。そして、息を整える暇なく人々の目に触れぬよう去っていった。

野次馬たちが集まり騒いでいたが、誰かが救急車と警察を呼んだために間も無くその場は警察によって取り締まわれた。警察はすぐさまテープを張り、野次馬たちを事件現場から遠ざけると、同時に交通規制もされた。

「北島刑事」

一人の刑事が駆け寄ると、被害者の倒れていた場所で合掌していた中年の男性が腰を上げた。少し白髪があったその男は、いつも茶色いロングコートを着ており、古風な人間の持つ独特な風格のようなものを備えていた。

「被害者の名前は西脇ひさし。クラウドカンパニーというコンピュ

「夕開発の会社に勤める四十八歳の男性で、一人暮らしの独身。鑑識の報告によりますと、被害者の左胸には前の二件と同様刺青のよ
うな文字があり、今回も文字を断ち切るかの如く刃物が刺さった跡
があったそうです」

報告を聞くと、北島は面倒くさそうな表情で頭を掻いた。そして、
「これで三件目か。それで、目撃者の証言は聞けたか？」

と、目撃者が乗せられている車に目を遣りながら尋ねた。

「はい。第一発見者によると、被害者は誰かとぶつかつた後に突然
倒れたようです。他の目撃者からも同様の証言が得られました」

北島は手帳を取り出し、報告をメモし始めた。

「顔を見た者は？」

「一瞬のことだったそうで、誰も見ていないそうです。……ただ、
そのすぐ後で白いコートの少女が走り去るのを見た者がいます」

白いコートという言葉が聞くなり、北島は表情を曇らせた。

(白いコート？ まさかな)

北島はコートの内ポケットから煙草を取り出すと、火をつけ、大き
く一息吸った。

「交通整理と現場検証に必要な最低限の人数を残して、他の者は一旦
署に戻るよう伝えてくれ。署のほうで報告を聞いた後に捜査指示を
出す」

警視庁においての経験と実績を評価され、本部よりこの事件を全面
的に任せられていた北島はするように指示を出すと、車に乗り込ん
だ。

「目撃者はどうします？」

立ち去ろうとする北島に刑事が尋ねると、

「今日はもう帰って頂け。その際、連絡先を聞いて、後日詳しい話
を聞きに伺うと伝えておいてくれ」

北島は答え、車を走らせた。

署に戻り、一通りの報告を受けた北島は、

「事件当時被害者と接触を持ったと思われる人物と白いコートの女

性の特定、刺青の意味の捜査、ここ最近の被害者の様子の調査に分かれて捜査を行う。捜査員の割り振りは紙に書いてあるとおりだ。鑑識は凶器の特定を急いでくれ」

集まっている者たちに指示を出すと、ゆっくりと立ち上がった。

「北島さん、どちらに？」

「少し気がかりなことがある。何かあったら電話をしてくれ」

北島はそう言うと、コートを手に取り会議室を出て行った。

事件発生

第一の事件が発生したのは六月の初め、東京でのことであった。被害者は医師の川本鳴海四十五歳であり、彼には一人の娘がいた。名は咲という。当時高校一年生であった咲は、両親を事故で亡くし、去年鳴海に施設から引き取られた。そして、咲は施設から通っていた高校から鳴海の家近くにある草華高等学校に転校し、通うこととなった。

近所には幼いころ父親に連れられて、度々施設に遊びに来ていた、細身だが背が高く、何よりも頼りがいのある咲の兄のような存在である精神科医の春日戒も住んでいたため、新しい土地で生活をする不安はなかった。

咲は笑顔の絶えない子で、鳴海が咲の誕生日に贈った白いコートが一番のお気に入りとしてよく着ていた。それを纏った姿はまるで天使のようだと、周囲の人に微笑を与え、そんな咲は学校でもすぐに友達を作ることができた。

咲は時折ふいに悲しげな表情を浮かべることがあったが、これからは幸せな生活を送られるだろうと皆が確信していた。第一の事件はそんな矢先の出来事であった。

咲は学校が終わると、友達とのおしゃべりもほどほどにし、学校帰りに商店街へと夕飯の買い物に出かけた。すると、いつものようにあちこちの店から声がかかった。

「咲ちゃん、今日はエビが安いよ」

「ごめん、おじさん。今日は肉じゃがなの」

商店街に入っですぐにある魚屋のおじさんが声をかけると、咲は笑顔で答え、二軒先にある八百屋へと向かった。

「おじさん、じゃがいもください」

「おう、咲ちゃん。じゃがいもだね」

八百屋のおじさんはじゃがいもを袋に入れると、

「ダイコンはどうだい？ お買い得だよ」

一際大きなダイコンを手に取り薦めた。

「うーん。じゃあ、もらおうかな」

「よし来た。じゃあ、二割まけとくよ」

八百屋のおじさんは咲の気が変わらないうちにと、素早くダイコンをふくろにいれると咲に手渡した。すると、買い物に来ていた咲の家の向かいに住むおばさんが顔を覗かせた。

「あら、じゃあ私もダイコン頂こうかしら。もちろんまけてくれるわよね」

おばさんが笑いながらも強い口調で言うと、八百屋のおじさんは一瞬困った表情を浮かべた。しかし、

「よし、決めた。ただいまよりダイコンは二割引にしよう」

と、すぐさま値段を書き換えた。おばさんは慣れない仕草で咲にウイंकをしてみせると、咲も笑顔でウイंकをして返した。

「ありがとう、おじさん」

咲は満面笑みを浮かべながら、お金を支払うと八百屋を後にし、肉屋へと向かった。

「こんにちは、おじさん」

咲は肉屋でも主人と同じように会話をし、ここでも少しおまけしてもらつと、上機嫌で家へと急いだ。

咲が家に着くと、玄関には男性の靴が二足あった。鳴海がお客さんを連れ、めずらしく早々と帰ってきていたのである。

「お父さん、早かったのね」

咲は台所でお茶を入れている鳴海に声をかけると、台所に買ってきた食材を置きエプロンを着けた。

「お客さんが来ているから、ゆっくりでいいよ」

鳴海はそう言うと、お茶を二つ持って部屋へと歩いて行った。

「お茶菓子持っていくね」

咲が廊下へ顔を出して言うと、

「いや、いい。大事な話だから部屋に来ないように」
鳴海はなぜか強張った表情で強く念を押して、部屋へと入っていった。

（あんな言い方しなくていいのに）

咲は右眉をピクリと上げ、大きく息をつくと台所で夕飯の支度を始めた。

咲が肉じゃがを煮込み終わると同時に衝動買いしたダイコンで味噌汁の一品を作り終える頃、ボタンつと玄関の扉が閉まる音がした。

咲は玄関に向かい、お客さんの靴が無くなっていることを確認すると、台所に戻り、おかずを盛り付けた。そして、鳴海を呼びに部屋へと向かい、ドアを叩いた。しかし、しばらく待っても中から返事がしなかったため、咲は再度ドアを叩いて、

「お父さん、居るの？」

声かけた。それでも返事がしないので、

「開けるよ」

咲は静かにドアを開けた。すると、眠っているように鳴海は机の上で伏せていた。

「もう。お父さん、ご飯できたよ」

咲は頬を膨らませると鳴海の側へとゆっくりと歩み寄り、軽く肩を揺すった。それでも起きない鳴海に対して、咲は怒鳴り口調で、

「もう。お父さん」

今度は鳴海を強く揺すった。すると、鳴海は糸の切れたマリオネットのように椅子ごと倒れこんだ。

「お父さん？」

不思議そうな表情を浮かべ、咲は倒れた鳴海の身体を起こすと、何やら生温かい液体に触れた。咲は少し粘りのある赤い液体が血であることがわかると、

「いやー」

目を見開き、血のついた手を見つめながら甲高い声を上げた。

川本家に差し入れをしようと、すぐそこまで来ていた戒は、咲の悲鳴を聞くと、慌てて玄関の扉を開けた。

「咲、どうした？」

問いかけても何一つ反応がないため、戒は家の中に入り、部屋を一つ一つ覗き込んだ。そして、鳴海の部屋だけドアが開けっ放しになっているのを見つけると、戒は急いで鳴海の部屋へと入っていった。「鳴海さん？ 咲？」

戒が再度問いかけると、そこには深紅のジュータンに横たわる鳴海さんと血の付いた手を見つめ、放心状態になっている咲の姿があった。

「咲、どうした？ 何があった？」

戒は咲のもとに駆け寄ると、咲の肩を両手で揺すった。しかし、咲は何も答えることができず、ただ茫然と自分の手を見つめていた。

戒は鳴海の脈を取り、すでに息絶えていることを確認すると、ゆっくりと咲を抱き上げ、居間へと連れて行った。そして、咲を椅子に座らせると、戒は警察へと電話をかけた。

「もう大丈夫だよ」

戒は咲の手に付いた血をタオルで拭いながら優しく話しかけると、放心状態の咲を悲しげな表情を浮かべながら、静かに抱きしめた。

数分後、通報を受けた警察が到着した。

「失礼します。警察の者です」

戒が玄関まで行くと、数人の警察官が玄関の扉を開けて立っていた。「どうも」

戒が会釈をすると、

「通報された方ですか。私、北島と申します」

茶色のコートを羽織った一人の男が前に出た。

「はい。私が通報しました。春日戒と言います」

戒が落ち着いた口調で答えると、

「では、早速被害者の所へ案内してもらえますか？」

北島は坦々と尋ねた。

「わかりました。中へどうぞ」

戒はそう言っていると北島たちを家の中へ上げ、鳴海の部屋へと案内した。途中、北島は居間の咲に挨拶をしたが、咲は未だ放心状態であった。

「とりあえず部屋へ」

その様子を見ていた戒は、北島たちを誘導した。咲の様子を不審に思った北島は刑事の一人を居間の前に立たせ、咲の様子を見させることにした。

鳴海の部屋に入ると、北島はすぐさま倒れている鳴海のもとへ歩み寄った。そして、脈と呼吸が無いことを確認すると、北島は静かに手を合わせた。

「おい、鑑識を呼べ」

北島はドア付近にいる一緒に来ていた刑事の一人に指示を出し、

「事件が発生したときの様子を説明してもらえますか？」

早速戒に事件当時の状況を尋ねた。

「はい。私が夕飯の差し入れを持って行こうとしたとき、家の中から咲の、先ほど居間にいた子の悲鳴が聞こえました。それで、慌て家の中に入り、咲と彼を探してこの部屋にきました。そうしたら、鳴海さんが倒れていて、隣には手に付いた血を見て呆けている咲がいました」

戒は北島の横まで歩み寄ると、鳴海の遺体を眺めながら説明を始めた。

「で、通報されたわけですね。それでは、あなたと被害者の関係は？」

「私は咲の幼馴染で、度々食事を共にしたり、一緒に遊びに出かけたりしていました」

北島は戒から一通り状況を聞き終わると、

「ここは直に来る鑑識に任せて、私たちは居間に行きましょう。咲さんにも話を伺いたい」

戒をつれて居間へと向かった。咲の様子を気遣い、戒は部屋を出て

から終始心配そうな表情を浮かべていた。

「大丈夫。少し話を聞くだけですよ」

すると、北島は穏やかな表情で話しかけ、廊下を歩いていった。

「変わったことはなかったか？」

北島は居間の前に立っている刑事に尋ねた。

「先ほどから何かうわ言のようなことを言っています」

それを聞いた北島はそつと居間を覗き込んだ。すると、咲は確かに何かをつぶやいていた。北島は咲に気づかれないようにゆっくりと近づくと、咲の声に注意を傾けた。

「誰？ あなた、誰？」

「私ですか？ 北島と申します。安心してください。警察の者です」

北島は咲の問いかけに優しい口調で答えたが、咲の反応は変わらなかった。

「誰かがそこに居るのですか？」

北島は咲の顔を覗きこみながら尋ねた。

「誰か、居る。泣いている。アイ？」

咲はポロポロと涙をこぼし始めた。咲がその言葉を発した瞬間、

「今日は、もうやめてください」

戒は慌てた様子で咲のもとに駆け寄り、静かに抱き寄せた。そして、

北島を睨み付けた。

「わかりました」

北島は困った顔で頭を掻くと、

「署に戻って事件の詳細を上の方に報告しておいてくれないか？」

後ろに立っていた、少し小太りの刑事の一人に指示を出した。

「わかりました」

その刑事はすぐさま家を出てパトカーに乗り込むと、川本家を後にした。

それからしばらくすると、警察署から鑑識が到着した。北島は玄関まで迎えに行き、彼らを家の中に招き入れると、鳴海の部屋まで案内した。

「よし、始めてくれ」

鑑識の管理官の一声で鑑識の人たちがそれぞれの仕事を始めた。北島は管理官に歩み寄ると、北島が事件現場に到着した当時の状況について説明を始めた。

「死因等を詳しく調べるため、川本鳴海さんを司法解剖させていただきます」

鑑識が一通り仕事を撮り終わると、管理官が居間にいる戒のところにやって来て一言告げ、鑑識二名が担架で鳴海の遺体を運び出していった。

「お前たちは近所の人たちに事件発生前後、不審な人物を見かけなかったかなどの聞き込みをしてくれ」

管理官と一緒に居間へと戻ってきた北島は、一緒に来ていた刑事たちに指示を出すと、

「戒さんは、お引取り頂いて結構です。また後日話を伺わせてください」

ソファーで咲を抱きかかえている戒に告げた。

「いえ、今日はこの家に泊まらせてもらいます」

戒は強い口調で答えるた。

「咲を自分の部屋のベッドに寝かせてきます」

そして、戒は疲れ果てたのかいつの間にか眠ってしまった咲を抱きかかえ、居間を出て行った。

「では、私たちは聞き込みにいつてきます」

「ああ。よろしく頼む」

刑事たちが家を出て行くと同時に戒は居間へと戻ってきた。

「私も今日はここに泊まらせてもらいます」

北島は戒に声をかけるとネクタイを緩めた。

「助かります。では、毛布を持ってきます」

疲れているのか、戒は冷ややかな顔で言うと、顔を強張らせたまま再び居間を出て行った。

葬儀

咲は暗闇の中で立ち尽くしていた。

『殺して。お願い、殺して』

咲はどこからともなく聞こえてくる声に辺りを見渡した。気づくと手には血のついた小刀を持っており、白いコートは血で赤く染まっていた。

『いやあー』

咲は悲鳴を上げた。すると、次の瞬間、見慣れない制服の女子高生の姿が頭を巡った。その姿は口元までしか見えず、その女子高生がどのような顔をしているのはわからなかったが、こぼれ落ちる涙とうつすら浮かぶ優しい微笑が印象的で、それでいて、どこか妙に懐かしさと哀しさを覚えた。

咲が目を開けると、見慣れた天井がそこにあった。そして、ふと時計に目を遣ると時刻は深夜二時を回っていた。

「夢？」

咲はホッと息をつくと、胸をなで下ろした。すると、廊下から慌しく駆けてくる足音が聞こえた。

「咲」

心配そうな顔をして戒がドアを開いた。咲の悲鳴を聞いて駆けつけたのである。

「お兄ちゃん？」

咲はゆっくりと起き上がると、なぜ戒が家の中にいるのか判らず、不思議そうな表情を浮かべた。そして、戒の横にいる見慣れない男へと視線が動いた。

「初めまして。警視庁の北島と申します」

警視庁という言葉を聞くなり、血を流す鳴海の姿が咲の脳裏を過ぎり、一瞬身体を震わせた。

「お父さんは？」

目を見開いて必死に尋ねる咲に対し、

「鳴海さんは、二日前に亡くなりました」

北島は極めて冷静に答えた。すると、咲は途端に顔を蒼くして震えだした。

「今日の朝、葬儀を行うから、今はお休み」

その様子を見ていた戒は、咲に優しく声をかけ横に寝かせると、布団をかけた。

「だけど、今日がお通夜なんですよ？」

「弔問者はもう帰ったし、今日は俺と刑事さんが起きているから心配ないよ。咲は葬儀に備えて寝ていなさい」

咲の今にも泣き出しそうな顔から発せられる切ない声を聞くと、戒は咲を安心させるために優しく微笑みながら咲の頭を撫でた。その様子を見ていた北島も本日中の事情聴取はあきらめたのか、

「戒さんの言うとおりだ。まだ休んでいたほうがいい」
優しく微笑みかけた。

「居間にいるから、何かあったら声をかけなさい」

戒はドアのほうへと歩きながら言うと、二人は咲の部屋を後にした。

ドアの閉まる音を聞くと、咲は一息つき、再び目を閉じた。しかし、先ほどの夢がどうにも気になってしまい、中々寝付くことができなかつた。

「……お父さん」

鳴海との数少ない思い出を想い返しながら、居間にいる戒たちに声が聞こえないように布団に潜り込み、声を殺しながら静かに涙を流した。そして、泣き疲れたのだろうか、気づくと咲は布団に潜り込んだまま眠ってしまった。

陽が昇り、すずめの鳴き声が街に響き渡る頃、戒が咲を起こしにやって来た。

「咲、そろそろ起きて支度しなさい」

朝食の準備をしていた戒は、エプロンを着けたまま咲のベッドに腰掛け、咲の肩を揺すった。

「うん」

目を擦りながらゆっくり起きる咲の顔を見て、優しく微笑みながら、
「涙の跡が付いているよ。顔を洗っておいで」

戒は咲の頭を軽く撫でると、ゆっくり咲を引つ張り起こした。すると、数日間ほとんど一日中眠っていた咲は、足元が安定せず、時折ふらつきながら洗面所へ向かった。

洗面所で鏡を見た咲は、涙の跡や寝癖でクシャクシャになっている自分の顔を見て、思わず笑ってしまった。

(すごい顔しているなあ)

咲は蛇口を一杯捻ると、勢いよく洗面所に頭を入れた。

顔を洗い、寝癖を直し終わると咲は居間へと歩いていった。すると、居間には朝食が並べられており、戒と北島がすでに席に着いていた。

「咲、ご飯食べよう」

「うん」

咲は笑顔で戒に答えると自分の席に座った。

「すみません。連日食事まで頂いてしまって」

「いいえ。住み込みの用心棒を雇っていると思えば安いものです」
北島が頭に手を当てながら申し訳なさそうに言うのに対し、戒は笑いながら答えた。すると、咲もいつものように優しく微笑んだ。その笑顔は、その空間にあるすべてのものを暖かく包んだ。そして、それを見た戒と北島は安堵の表情を浮かべ、互いを見合い、照れくさそうに微笑んだ。

皆が食事を終わると、咲は食器をまとめ始めた。

「片付けは俺がやっておくから、準備しておいで」

「うん」

咲はまとめた食器を戒に手渡すと静かに席を立ち、部屋へと戻っていった。

「あんなにも周囲を温かい気持ちにさせる笑顔、久しぶりに見まし

たよ。こんな時なのに、強い娘ですね」

「笑顔には人の心を和ませ、癒す力があります。他人だけでなく自分も含めて。咲はそれを最大限に発揮できる娘なのでしょう」

北島がニコニコと微笑みながら言うのを聞くと、戒は笑顔で答えた。そして、戒は食器を台所へと運んだ。未だ、穏やかな気持ちに包まれている北島は、しばしその余韻に浸った。

咲は制服に着替えると、鳴海の棺の前で立ち尽くしていた。呆然と鳴海の顔を見つめる咲の気持ちを代弁するかのようには、外ではポツポツ雨が降り始めた。

鳴海は一人身であり、両親もすでに他界していたため、弔問者は鳴海の仕事関係と知人、咲の担任と友達、近所の方々程度であった。

「この度は、ご愁傷様です」

「足元の悪い中、わざわざすみません」

弔問者が集まると、咲と戒は決まりきった挨拶を交わし、彼ら之家へと招き入れた。そして、関係者が集まると、葬儀が執り行われた。

読経が終わると、捜査で鳴海の遺体がお通夜の日の夜まで還ってこなかったため、お別れをする時間を設けようと出棺までしばし時間を置くこととなった。

「友達のところに行っておいで」

戒は、そっと咲の背中を押した。咲は小さくうなずくと、うつむいたまま担任や友達のところへと向かった。

「わざわざすみません」

咲が周りに聞こえるか聞こえないかくらいの声で一言声をかけると、
「大変だったね」

咲の通う高校の担任が咲の肩に手を置いた。そして、気づくと咲は友達に囲まれていた。

「咲、大丈夫？」

「ありがと。私はもう大丈夫だよ」

一人がハンカチで顔を覆いながら、咲に話しかけると、咲はいつも

のように優しく微笑みながら、その娘を抱きしめた。しかし、堪えきれない涙が、静かに咲の頬を流れていった。それを見た友達も大粒の涙を流した。そして、しばらくの間、咲たちは黙ったまま涙を流し続けた。

「咲、そろそろ」

戒は咲にそつと歩み寄り声をかけると、咲の担任や友達に頭を下げた。

「うん」

咲は声を震わせながら答えると、戒に肩を抱かれて鳴海のもとへと歩いていった。

棺は鳴海の知人によって霊柩車へと乗せられた。そして、咲は鳴海の遺影を持つと、霊柩車に乗った。

ゆっくりと発車する霊柩車の中から、咲は合掌する人たちを見つめながら、涙を堪えて何度も小さく頭を下げた。戒も自分の車に乗ると、鳴海の知人を数人乗せ、霊柩車の後ろをついて火葬場へと向かった。

火葬場に到着すると、棺はすぐさま炉前へと運ばれた。そして、僧侶が読経を終えると、それぞれが鳴海のもとへと歩み寄り、最期の別れを行った。

咲はその様子を後方から静かに見ていた。すると、先に鳴海との別れを終えた戒が咲に歩み寄り、花を手渡した。

「行つておいで」

それを聞くと、咲は小さくうなずき、鳴海のもとへとゆっくりと歩いていった。一歩進む度、こぼれ落ちる涙に周囲の人たちは言葉を失くし、道を開けた。

心臓の鼓動さえ響き渡りそうなくらい静まり返ったその空間で、咲は棺の横に立つと、鳴海の顔の横に花を添えた。咲は幾度となく想いを言葉にしようと口を開いたが、溢れる感情と涙で言葉にすることができず、何度も口をパクパクさせた。

「ありがとう」

咲はようやく一言想いを発すると、咲は涙でくしゃくしゃになった顔でいつものように微笑んだ。すべての想いが詰まったように感じられたその笑顔は他のどのような言葉も不要にさせた。周囲の人々もその笑顔を見るなり、再度激しく涙を溢れさせた。

「そろそろ時間ですので」

係りの人の一声で咲は棺から一步離れた。すると、係りの人は手際よく棺のふたを閉めた。そして、僧侶の読経が始まると、参列者は線香を棺の上へと載せていった。

戒が線香を載せ終わると、最後に咲が残りの線香を上に乗せた。

「バイバイ」

咲が優しく微笑みかけ、手を振ると、鳴海は炉の中へと消えていった。

転機

「……は生きていてはいけないの」

咲は暗闇の中で再度声を聞いた。

「あなたは誰？」

咲は声を上げ、辺りを見回した。

「私はあなたよ。私は哀」

「それはどういう意味？ それに誰が生きていてはいけないの？」
必死に尋ねる咲だが、答えは返ってこなかった。

カーテンの隙間から差し込む光に包まれ、咲は静かに目を開けた。

「咲、北島さんが来ているよ」

「ノックぐらいしてよ」

戒が咲の部屋のドアを開けると、咲は枕を投げつけ頬を膨らました。

鳴海の死去で身寄りのなくなった咲を隣近所の人々や商店街の人々が引き取りたいと名乗り出たが、戒が精神科医ということや咲の希望もあって、戒の父親賢志が引き取り、咲は戒のマンションから高校に通っていた。

「悪かったよ。さあ、早く着替えて起きておいで」

戒はそう言うと、逃げるように部屋を出て行った。咲は大きく伸びをする。眠い目をこすりながら静かに立ち上がった。そして、着替え終わるとリビングへと向かった。すると、リビングには椅子に座ってお茶をすする北島の姿があった。

「すみませんね。せっかくの日曜日に朝早く押しかけてしまって」

「いいんですよ。起こさないと昼まで寝ているんですから」

戒が咲のほうを見て、笑いながら言うと、

「余計なことは言わなくていいの」

咲は頬を赤らめながら恥ずかしそうに怒鳴りつけた。

「ハハハ、元気そうでした」

その様子を見ていた北島は、声を上げて笑った。

「それで、今日は？」

咲が北島に尋ねると、北島はすぐさま真剣な面持ちに変わった。

「今日伺ったのは捜査状況を伝えるとともに、発見当時の状況を説明して頂くためです」

咲は北島が話し始めると席に座った。そして、戒の出した湯飲みを両手で握り、ジッと見つめた。

「鳴海さんは、心臓を一突きされており、ほぼ即死であったと考えられます。近所の方が、犯行時刻に黒いコートの人間が走り去るところを目撃していますので、おそらくその人物が犯人であると思われるます」

「犯人の特定に繋がる手がかりは何か得られているのですか？」

戒が横から口を挿むと、北島は大きく首を横に振った。

「犯人について何か知っていることありませんか？」

北島は咲に問いかけた。

「ごめんなさい。父にはお客さんが来ているから部屋に来るなど言われただけで、他には何も聞かされていないんです」

咲はうつむきながら、静かに答えた。

「では、これについて何か知りませんか？」

そう言うと、北島は一枚の紙を取り出した。紙には文字のようなものが書かれていた。

「いえ、見たこともありません。何ですか、それ？」

それを見るなり咲は不思議な表情を浮かべた。

「鳴海さんの心臓部に同じものが彫られていました。何かの文字あるいは記号ではないかと考えて調べを行っていますが、未だこれが何を指すのかわかっていません」

「刺青ですか？ それは事件と関係があるんですか？」

戒は席に腰掛けると北島に尋ねた。

「わかりません。ただ、可能性があることは調べておかないと」

北島は答えると、ゆっくりとお茶をすすった。そして、それからしばらく沈黙が続いた。

スズメの声が静かに響き渡る静けさの中、再び北島が口を開いた。「アイというのは誰だかわかりますか？」

突然の質問に目を丸くする咲を前に、

「いや、ね。事件当時に咲さんが『アイ?』と言ったことが妙に引っかけました」

北島は話を続けた。

「私が言ったんですか？」

「ええ。確かに」

咲が驚いた顔で尋ねると、北島は強い口調ではっきりと答えた。

「……そうですか。でも、私の知り合いにアイという名前の人は一人もいません」

咲は複雑そうな顔を浮かべたままうつむくと、湯飲みを見つめた。

「事件のシヨックで意味もなく口に出してしまっただけでしょう。こういう事件の被害者や目撃者にありがちな症状ですよ」

咲の様子を見ていた戒は、弁護するかのようにな北島に説明した。

「そうですか」

北島は渋い顔のまま咲をジッと見た。

「今日はこのくらいにしていただけませんか？ 少し頭痛がします」

咲はうつむいたまま、北島に静かに言った。北島はしばらく考えた後、

「わかりました。何か思い出したことがありましたら連絡ください」
穏やかな口調で咲に声をかけると、ゆっくりと席を立った。戒は玄関まで北島を見送ると、リビングへと戻った。

咲は湯飲みを握ったまま、静かにうつむいていた。

「ご飯を食べたら散歩でもしようか？」

その様子を見て戒は、心配そうな表情で話しかけた。

「うん」

咲はうつむいたまま小さな声で答えた。

連日降り続いていた雨も止み、外はめずらしく雲ひとつない晴天に恵まれていた。

「やっぱり晴れていると気持ちいいね」

咲は元気に笑いながら駆けていくと、

「走ったら散歩にならないだろう」

咲の元気そうな様子を見て安心したのか、戒も穏やかに微笑みながら咲を追いかけた。しかし、日頃の運動不足が祟って、咲になかなか追いつけない戒は、すぐに息切れを起こしてしまった。

「お兄ちゃん、もう歳だね」

咲は戒をからかうと、優しく微笑みながら戒の手を引いた。

「公園に行こうか？」

「お兄ちゃん、休みたいんでしょ」

戒が息を切らしながら言うと、咲はニヤリと笑った。そして、戒の手を強く引つ張ると、咲は全力で駆け出した。

「ばか、咲」

戒は息を整える間もなく、咲に引つ張られるがまま走っていった。

公園に着くと、久しぶりの運動で不甲斐なくも汗だくになってしまった戒は、膝に手を乗せて身体を支えた。そして、切れた息を整えると同時にすぐさま空いているベンチを探した。しかし、久しぶりの晴天で、しかも日曜日ということもあり、めばしいところは子供たちや家族連れでほとんど埋め尽くされていた。

「あの木の下で休もうか？」

戒が一生懸命休むところを探している姿を横目に、咲はクスツと笑いながら、公園の隅にある大きな木を指差した。

「そうしよう」

待っていましたと言わんばかりに戒は満面笑みで答えた。咲はその顔を見て、再度笑いながら戒の手を静かに引いて歩き出した。

咲は木陰に座ると、遠くでボールを蹴って遊ぶ少年を見つめていた。

「まだ、辛いかな？」

あまりに切なそうなのその横顔に、戒が思わず尋ねた。

「まあ、ね。でも、お兄ちゃんがいてくれるから、そんなでもないかも」

咲はゆっくりと戒のほうに顔を向け、静かに微笑んだ。

「ごめん、変なこと聞いて。悲しげな表情を浮かべていたから、つい」

戒はそう言っていると、咲から目を逸らし、ゆっくりとうつむいた。その様子を見ていた咲は、穏やかな表情で空を見上げ、静かに話し始めた。

「最近ね、私変なの。突然、見たこともない情景が浮かんだり、女性の声が聞こえたり」

「女性の声？」

戒は咲の横顔を見つめた。

「うん。北島さんには黙っていたけれど、哀っぽい人の声。突然声が聞こえたり、夢に出てきて訳のわからないことを言ったりするの」

「たとえば、どのようなことを言うの？」

戒が尋ねると、咲は一瞬恥ずかしそうな表情を浮かべた。そして、

「私はあなた、だって。私って二重人格なのかな」

咲はうつむきながら続けると、自分で自分を笑いあげた。戒は咲の言葉を聞くなり、目を丸くし、難しい表情を浮かべた。

「私、病気なの？」

そんな戒の表情を見て、不安を抱いた咲は心配そうに尋ねた。すると、戒は一瞬ハツとした表情を浮かべたが、

「大丈夫だよ。あんな事件があったせいで一時的に記憶が錯乱しているだけだと思う」

微笑みながら咲に安心するよう言った。

「……そう。そうだよね」

咲は困惑した表情を浮かべたが、戒に心配をかけないように笑顔で答えた。

しばらく、二人静かに空を見上げていた。すると、先ほどまでの穏やかな陽気が一転し、風が強く吹き始め、それに乗って雨雲が徐々に空を覆い始めた。

「雨、降りそうだね」

咲が落ち着いた口調で言うと、

「ああ。帰ろうか」

戒はゆっくりと立ち上がり、咲に向かって手を伸ばした。咲は軽く微笑みながら戒の手をつかんで立ち上がると、ズボンに付いた砂を払った。そして、再度戒の手をつかみ、歩き始めた。

「近道しようか？」

公園を出ると咲はニコツと微笑み、戒の手を引いて狭い路地へと入っていった。

「よく知っているな。こんな道」

戒は咲に手を引かれるまま、狭い路地へと入っていった。比較的緑の多いその路地は、風にあおられ、植物の青々とした穏やかな香りが醸し出されていた。

「この香りが好きで、時々通って帰るんだ」

咲は戒のほうを振り向き、笑顔を見せた。

（よかった。咲、笑えている）

その笑顔を見た戒もまた、つられるように笑顔になった。

二人が狭い路地を抜けて、駐車場を横切ろうとしたとき、咲が突然立ち止まり、一点を見つめたまま硬直した。

「どうした、咲？」

戒は立ち止まった咲の顔を覗き込みながら尋ねた。すると、同時に頭上に雫が落ちてくるのを感じた。

「雨だ。急ぐぞ」

戒は空を見上げながら言うと、再度咲の顔を覗き見た。

「戒」

咲は呆けたまま一言発した。聞き覚えのある、しかし、明らかに咲とは異なる声色に戒は驚き、咲の見つめている先に視線を移した。

すると、視線の先には一人の少年が三人がかりでいじめられている姿があった。その様子を見た戒は、慌てるように声を上げた。

「お前たち、何している？」

その声に驚いた少年たちは逃げ出すようにその場を後にした。いじめを受けていた少年もまた、何も言わずうつむいたまま歩いてその場を立ち去った。

「戒、どうして？」

うわ言のように声をあげる咲の肩に手を置き、

「おい、咲。しっかりしろ」

戒は激しく咲の肩を揺すった。しかし、虚ろな眼差しで戒を見つめる咲の瞳をみて、戒は悲しげな表情を浮かべた。

「哀？」

戒は下唇を噛み締めながら咲の耳元でささやいた。

咲は戒に静かに微笑みかけると、まるでブレーカーが落ちたかのように咲は意識を失った。戒は倒れこむ咲をそっと支え、そのまま抱きかかえると雨の中を家まで駆けていった。

再生

カーテンの隙間から差し込む光で目を覚ました咲は、時計を見るなり飛び起きた。

「何で起こしてくれなかったのよ。今日は学校あること知っているでしょ」

咲はドタバタと音を立てながらリビングに向かうと強い口調で戒に言った。

「昨日倒れたんだ。今日は休んだほうがいい」

朝食を並べていた戒は困った顔をして答えた。

「大丈夫よ」

咲は並べられた朝食からパンを一枚啜えると、そのまま学校へ行く支度を始めた。

「こら、咲。行儀が悪いよ。座って食べなさい」

「仕方ないでしょ」

咲は支度を終え、制服に着替え終わると、食卓に用意されていた牛乳を一気に飲み干した。そして、お気に入りの白いコートを羽織ると、

「いってきます」

咲は飛び出すように家を出て行った。

「気をつけて行けよ」

戒は玄関から顔を出すと、大きく手を振って咲を見送った。

「はい」

咲は戒のほうを振り返ると、大きく手を振りながらマンションの階段を降りていった。

雲の隙間から穏やかな日が差し込む月曜の朝。ごみを出し終え、顔を合わせた近所のおばさんたちが世間話をし始めるその横を、咲は白いコートをはためかせて走って行った。その様子は、まるで羽を飛ばたかせる鳥のように見えた。

「今日もお寝坊した天使ちゃんが駆けてゆくわよ」

「本当ね」

おばさんたちがクスクス笑いながら話をしていると、その様子に気づいた咲は、

「いつてきます」

恥ずかしそうに笑いながら大きく手を振った。咲のぎこちない笑顔を見ると、おばさんたちも微笑みながら、

「いつてらっしゃい」

小さく手を振り、咲を見送った。

校門前の大きな水溜りを飛び越えると、咲は勢いよく校舎内へと走って行った。すると、下駄箱では、ちょうど咲の友達が上履きに履き替えていた。

「おはよう、里絵」

「おはよう」

咲が声をかけると、里絵は振り向き笑顔で答えた。

「身体は大丈夫？」

「うん。心配かけてごめんね」

二人は話しながら歩いて教室へと向かった。そして、咲が教室の扉を開けると、

「咲、おはよう」

数人の女子が咲を囲んだ。

「はい、そこ。席に着きなさい。それに春日さんと菅谷さん、遅刻ですよ」

出席を取っていた担任が二人を指差し、注意を促した。

「はい、すみません」

咲たちは互いに顔を見合わせると、笑いあいながら席に着いた。そして、いつもと変わらない穏やかな時間が過ぎていった。

放課後、夕陽が教室に差込みグラウンドでは部活で賑わう声が聞こえる中、咲は教室に残って欠席していた分の授業ノートを里絵に借り、里絵に協力してもらいながら書き写していた。

すると、教室後方の扉が開き、女子数人が入ってきた。咲とはあまり気の合わない女子であるため、教室内は少々重苦しい雰囲気に包まれた。

「最近いい事ないんだ」

「でもまあ、家族が死ぬよりましなんじゃない」

「だよねえ」

何の前振りもなく突然咲を中傷して笑いあう女子たちに腹を立て、里絵は彼女たちを睨みつけ、席を立った。

「今日はここまで。里絵、帰ろう」

咲も同時に席を立ち、里絵に微笑みかけた。そして、帰りの支度を終わると、咲は彼女たちと目を合わせることなく静かに教室を出て行った。

学校を出ると、重苦しい空気の中を二人静かに歩いていった。終始怒りと悲しみの二つの感情を併せ持ったような複雑な表情を浮かべる里絵に、

「ありがと、私のために怒ってくれて」

咲は優しく微笑んだ。里絵はその笑顔を見る負の感情で満たされた自分の心を恥ずかしく思った、

「うっん。私のほうこそごめんね」

里絵は慌てた様子で笑顔を作り、笑顔で答えた。

それからは他愛のない話をしながら笑いあい、二人は帰っていった。

咲は家の中に入ると、暗い面持ちで夕飯の支度を始めた。そして、先に食事を済ますと、咲は風呂を沸かしに風呂場へと向かった。すると、玄関の扉が開く音がした。

「お兄ちゃん」

待っていたと言わんばかりに笑顔で迎える咲の姿に驚いた戒は、

「どうした？ 何かあった？」

目を丸くして尋ねた。

「うっん、何でもないよ。おかえり」

笑顔で答える咲を見て、戒は優しく微笑みながら小さくうなずいた。「ただいま。で、学校は楽しかった？」

「うん」

食卓に着いた戒に夕飯を出しながら、咲は今日あった学校の話をした。もちろん、放課後の話だけは除いてである。

「お兄ちゃん、先にお風呂入る？」

一通り話し終わると、咲は時計に目を遣りながら尋ねた。

「ううん。まだ食べているから、先に入っていていいよ」

「じゃあ、先にお風呂入るね。後片付けよろしく」

戒の返事を聞くなり、咲はニヤリと笑って逃げるように風呂場へと向かった。

戒は食事を終わると、渋々夕飯の後片付けを始めた。そして、何事もなく夜は静かに更けていった。

咲が普通に学校に登校するようになって数日が経ち、ようやく平穏な日常が取り戻せつつあった。

「お兄ちゃん、いつてきます」

「いつてらっしゃい。気をつけて行けよ」

「はい」

エプロン姿の戒に見送られると、咲はいつものように時間ぎりぎりに家を出て行った。

「うわあ、雨すごく降っているよ」

咲は空を見上げると傘を開き、鼻唄混じりのステップで水溜りを飛び越えながら、学校へと向かった。

学校に着くと咲は上履きに履き替え、教室へと向かった。

あの事件以来、学校では数人の女子が咲のことを死神と呼び、忌み嫌う様が見られた。しかし、それ以上に皆が優しく接してくれたおかげで、咲は笑顔で学校生活を過ごすことができていた。

「おはよう」

咲がいつものように笑顔で教室の扉を開けると、

「おはよう」

笑顔とともにクラスメイトの声が返ってきた。咲はニコニコ微笑みながら自分の席へと着いた。そして、授業を受け、放課になると友達とおしゃべりをし、時々居眠りと、いつも通りの時間を過ごす。最後のチャイムが鳴り今日も何ごともなく終わりを迎えた。

放課後になると、咲は教室に残り、里絵とおしゃべりをして過ごしていた。

「ちょっとトイレにいつてくるね」

里絵が教室を抜けると、咲は教室に一人となった。すると、咲を嫌う女子たちが教室に入ってきた。

また後ろのほうで嫌なことを言われると思った咲は、帰る支度を整え、静かに里絵が戻ってくるのを待つことにした。しかし、いつもとは様子が違い、女子たちは咲の周りを取り囲んで腕を組み、座っている咲をジッと見下した。

「なに？」

咲が震えるような声で優しく微笑みながら尋ねると、

「死神さあ、消えてくれない。あなたのせいで周りの不幸が絶えないのよ」

咲の正面に立っていた、髪は坊主にし、女性の割には随分大柄の女子が、咲を睨み付けながら言った。身に覚えのない咲は、当然のことだが目を丸くした。すると、彼女の合図で周りの女子たちが、

「あなたのせいで彼氏と別れた」

「怪我して大会に出られなくなったじゃない。あなたのせいよ」

などの理不尽な文句をぶつけつつ、咲に平手打ちをした。

「何でこんなことするの？」

頬を赤くした咲が涙目で尋ねると、咲の後ろで終始うつむいたままであった一人が、咲の横にやって来た。

「あなたのせいで家のペットが死んじゃった。ねえ、返して。返してよ」

その女子は強く咲を突き飛ばした。すると、咲は椅子ごとその場に

倒れこんだ。

「あなたたち何しているの？」

椅子が倒れる音を聞いた里絵は慌てて教室の扉を開け、咲のもとへと駆け寄った。

「咲、大丈夫？」

里絵が咲の身体を起こすと、頬を腫らした咲は息を荒くして放心状態となっていた。

「何かやばくない？ 様子が変わだよ？」

一人が大柄の女子の耳元で囁いた。そんな中、咲は焦点の合わない目で辺りを見渡していた。

咲は先日の雨の日と同様、また記憶の錯乱を起こしていたのである。

『何でこんなことするの？ 何が楽しいの？』

空き地には女子高生が数人立っていた。中心にいる女子は震えながらも周りの女子を睨み付けた。

『生意気なんだよ。いちいち鼻につく態度しやがって』

長髪で長いスカートのリーダー格の女子が彼女を突き飛ばすと、彼女はその場に倒れこんだ。すると、手の着いた先には割れたビール瓶があり、彼女は手を切ってしまった。

『やばくない？』

隣に立っていた一人が言うと、

『い、行くよ』

リーダーの声で女子たちは足早に立ち去っていった。

傷を押さえてうずくまる彼女のもとに一人の男子高生が駆け寄った。

『中村』

彼はハンカチを取り出すと、彼女の傷口に巻きつけた。

『もういいよ。俺のことは放っておけばいいよ』

『私は平気よ。あなたがいるもの』

涙を浮かべながら言う彼の頬に手をあて、彼女は優しく微笑みかけ

た。まるで天使のようなその笑顔に心を包まれた彼は、真っ直ぐな涙を流し、小さくうなずいた。

我に返った咲は、自分の手から血が流れていることに気がついた。「いやあー」

咲は悲鳴を上げると、その場で意識を失った。すると、女子たちは逃げるように立ち去った。

里絵はパニック状態で身体を震わせながらも咲をゆっくりと横にすると、急いで職員室へ先生を呼びに行った。

目を覚ますと、咲は保健室のベッドにいた。不思議なことに職員が駆けつけたときには、傷口はもう塞がっていたため、また、学校側はあまり騒ぎにはしたくなかったため、病院には運ばなかったのである。

「咲？」

咲は聞きなれた声を聞き、ふと横を見るとそこには戒と里絵が座っていた。

「お兄ちゃんも里絵も心配かけてごめんね。もう大丈夫だから」

咲はいつものように笑顔を作ると、ゆっくりと立ち上がった。

「こんなところ早く帰って、家でゆっくり休もう」

戒は咲を背中に抱えると、険しい顔をして保健室を出て行った。里絵は咲のカバンを持つと、二人の後ろをついていった。

三人が廊下を歩いていると、咲の担任が前から歩いてきた。

「川本さん、もう大丈夫なの？」

「はい。心配かけてすみません」

咲が小さく頭を下げると、

「明日、病院で検査を受けさせます。咲を傷つけた連中の処分のほうを宜しく願います」

戒は険しい表情で言い放った。そして、里絵からカバンを受け取ると、二人は家へと向かった。

戒がマンションの玄関を開けると、電話が鳴っていた。

「部屋で休んでなさい」

戒は咲にそう言うと、急いで受話器を取った。

「はい、春日です。あ、どうも。えっ、それで？」

難しい顔をして話をする戒の様子を気にしながら、咲は部屋へと入っていった。そして、咲は制服からパジャマへと着替えると、戒が電話を終えるのをベッドの中で待った。

しばらくすると、戒が話し終え、受話器を置く音がした。すると、真っ直ぐ足音が咲の部屋へと近づいて来た。

「咲、入るよ」

「うん」

部屋のドアを開け、中に入ってくる戒の顔は曇っていた。

「どうしたの？ 誰から？」

咲が尋ねると、戒はゆっくりと口を開いた。

「北島刑事からだよ。今日の夕方に殺人事件が発生したらしいんだ」

「それで、どうして家に電話がかかってくるの？」

咲が当然の疑問を戒に問いかけると、

「被害者の胸には鳴海さんのものと同じ刺青があって、鳴海さんと同様に文字を断ち切るように刃物の跡があったらしい。それで、警察は今回の事件を連続殺人事件として捜査するそうだ」

戒は咲の目を見て答えた。鳴海は狙われて殺されたことを知り、咲は困惑し、今にも泣き出しそうな表情を浮かべた。

「咲は何も心配することないよ。とりあえず今日はもうお休み」

戒は優しく声をかけ、静かに部屋を出て行った。

真夜中、夕飯も食べずに眠ってしまった咲はお腹を空かしていた。そして、何か食べるものはないかとキッチンへと向かった。すると、戒が電気も付けずにリビングで酒を飲んでいるところを目撃した。

咲は声をかけようとしたが、戒は泣きながら何か言っていることに気づき、よく耳を澄ました。

「俺はバカだ。同じ過ちを繰り返して。すまない、哀」

哀という名前を聴いた瞬間、咲の心の内から切なさがこみ上げてき

て、瞳から涙が溢れ出した。

(なに、この想い？ 止まらない)

咲は壁をつたいながらどうにか部屋に戻ると、ベッドに潜り込み、溢れる涙を止めることなく、泣き明かした。

数日後、咲をいじめていた女子たちのうち、リーダー格である大柄な女子と咲を突き飛ばし、怪我をさせた女子の二名は退学処分となり、残りのものも一ヶ月の停学処分が言い渡された。少し厳しすぎるのではないかという周囲の反応も見られたが、二度と同じようなことが起こらないためにと、厳しい処分が下された。

咲は念のため精密検査を受けたが、どこにも異常が見られなかった。手の傷もすでに完治しており、倒れた際にどこかで切ったのだろうとされた。

咲はここ数日間、戒に哀という名の人物のことを幾度か尋ねようとしたが、戒の涙が思い出され、どうしても聞けずにはいた。

夢遊病

「咲、昨日の十二時くらいに渋谷にいなかった？」

登校途中、一緒に登校していた里絵が尋ねた。

「……………ううん。その時間はもう寝ていたよ」

「そう。じゃあ、人違いだ」

「……………」

あの事件以来、咲をいじめる連中はいなくなったが、咲と里絵は一緒に登校するようになり、里絵は学校でもなるべく咲から離れないよう心掛けていた。

「咲、昨日の夜はどこにいつていたの？」

「もしかして、デート？」

二人が教室に入ると、数人の女子が駆け寄り、からかうように尋ねてきた。

「マジかよ、川本」

男子たちが声を上げ、クラス中がどよめいた。

「えっ？」

「とぼけても無駄。私、見たんだから」

追求されて困った様子の咲を見かねて、

「それ、咲じゃないよ。昨日の夜は疲れて家で寝ていたらしいから」

里絵が横から口を挟んだ。

「えー、本当かな？」

女子たちが話をしていると、予鈴がなり、咲たちは席へと着いた。

どこにでもありそうな何気ない会話だが、咲は頭を抱えていた。

前にも一度夜中に街で見かけられたことや夜中に無意識のうちに家を出ようとして、戒に止められたことがあり、自分は夢遊病なのではないかと考えていたのである。

学校が終わると、咲は真っ直ぐ家に帰り、リビングの椅子に座って戒の帰りを待った。

「咲？」

いつの間にか眠ってしまった咲は、戒の声で目を覚ました。

「ダメだろ、こんなところで寝ていたら。夕飯は食べた？」

「ううん」

咲の返事を聞くと、

「ちょっと待ってなさい。すぐに作るから」

戒は疲れた様子を見せながらも、キッチンへと向かおうとした。

「お兄ちゃん」

咲は戒を呼び止めた。戒がゆっくり振り返ると、咲の深刻な顔であった。

「どうした？」

戒はとりあえずリビングの椅子に腰掛けると心配そうな表情で尋ねた。

しばらくうつむき押し黙っていた咲は、ゆっくりと口を開いた。

「お兄ちゃん。精神科医として、今の私はどう思う？ 夢遊病かな？ それとも何か違う病気？」

あまりに唐突な話で戒は目を丸くした。

「最近、夜な夜な活動をしていることを気にしているのか？」

戒は咲の質問の意図を読み取ると、咲に尋ねた。すると、咲はうつむいたままコクリとうなずいた。

「そうだな、可能性は高い」

戒が正直に答えると、咲は今にも泣き出しそうな表情を浮かべた。

「治るかな？」

「もちろん治るさ。ここ最近、色々なことがあったせいでストレスが溜まっているんだらう。時間が経って、気持ちが悪ければ良くなるよ」

咲は戒の話の話を聞くと、

「わかった。ありがとう」

顔を上げ、笑顔で答えた。

「すぐに夕飯を作ってやるから、着替えておいで」

戒は咲の頭をポンツと叩くと、キッチンへと向かった。咲はその場で一息つくと、ゆっくりと席を立ち、着替えるために部屋へと向かった。

夕食を終え、風呂を入り終わると、いつまでも咲はテレビを見ていた。

「咲、明日も学校だろう。早く寝なさい」

戒にそう言われても、咲は一向に部屋に戻ろうとしなかった。言葉ではわかったと言って見せても、実際には眠るのが怖いのである。

「今日は仕事が残っていて遅くまで起きているから、安心して寝なさい」

当然そのことに気がついていている戒は、咲に近づくと優しく声をかけた。

「うん」

咲はそう言つと、無理に笑顔を作った。そして、テレビを消すと部屋へと歩いていった。

暗闇の中で目を覚ました咲は、その見慣れた雰囲気、すぐさまそこが夢の中であると理解した。

「私のために彼が苦しんでいるのなら、救ってあげて欲しい。最愛のあの人のためなら、私はどうなってもかまわないから。そうでしょうっ。」

「哀さんね？ 誰のことを言っているの？」

どこからともなく聞こえてくる声に、咲は声を張り上げて尋ねた。

「私が間違っていたの。あの時は彼を止める唯一の手段だと思った。でも、結果はあの人を苦しめることに……」

次第にかすれてゆく声を聞いた咲は、いつか見た雨の日のいじめられている男の子を思い出した。

「あの、いじめられていた男の子？」

咲が落ち着いた口調で尋ねると、咲の視線の先に突如現れた女子高生は小さくうなずいた。

『また間に合わなかった。これで三人目。もう時間がない』
彼女は祈るように手を組むと、静かに姿を消していった。

『ちよつと待つて』

咲は彼女に駆け寄ったが、すでに姿なく、顔を見ることはできなかった。

部屋のドアが叩かれる音を聞いて咲は目を覚ました。すると、自分が白いコートを着ていることに気づいた。

「咲、学校に遅れるよ」

ドアを開けて入ってくる戒の顔を見て、

「私、昨日も外に出たの？」

咲は不安を浮かべて尋ねた。

「ううん。昨日は部屋から出ていないはずだよ。肌寒かったから気がつかないうちに着込んだんじゃないかな？」

戒は咲を安心させるために優しく微笑んだ。

「お兄ちゃん、ずっと起きていてくれたの？」

「ああ。仕事も溜まっていたしね。さあ、起きてご飯食べよう」

戒は部屋を出ると、食事が用意されているリビングへと向かった。

咲もまたリビングに向かうためベッドから出た。すると、シートが濡れていることに気がついた。咲はコートに目を移した。コートは所々濡れていた。

咲は慌てて部屋のカーテンを開いた。外は晴れていたが、地面は随分濡れていた。

疑念が拭い去れなかった咲だが、今は戒の言葉を信じ、コートを羽織ったままりビングへと向かった。

二人が食卓に着くと、戒はテレビの電源を付けた。すると、どのニュース番組でも昨夜深夜の一時ごろに起こった殺人事件に関する報道が流れていた。

「えー、今回の事件も一番目の被害者川本鳴海さん、二番目の被害者中村真也さんと同様に胸に刺青があったそうです。被害者はクロ

ウドカンパニーに勤める西脇ひさし氏四十八歳。西脇氏は十年ほど前に人間のクローンを作ろうとして社会追放された……」
レポーターの報道が始まると、戒は急いでテレビを消した。
『また間に合わなかった。これで三人目。もう時間がない』
夢に出てきた哀の言葉が頭を廻った。

「明日は土曜日だな。俺も仕事が休みだし、里絵ちゃんも誘ってどこか行こうか？」

表情を曇らせた咲を見て、戒は話題を切り替えるように慌てた様子で話しかけた。咲はそんな戒の様子を見て、

「うん、そうだね。今日、誘っておくね」

クスツと笑いながら答えた。

学校に着くと咲は教室で早速今朝の話を里絵に伝えた。

「明日？ いいよ」

「やった。じゃあ、明日ね。どこ行こうか？」

咲と里絵はその日一日、明日の予定を立てて盛り上がった。

陽が沈まないうちに咲は商店街で買い物をし、学校から帰ってきた。そして、咲が玄関の扉を開けると、電話の前で立ち尽くしている戒の姿が目についた。

「あれ、お兄ちゃん？ 今日は早いね」

「あ、ああ」

咲が驚いた様子で言うと、戒はぎこちなく答えた。咲はその表情に違和感を覚えながらも深くは追求せず、買い物袋を戒に手渡して部屋へと着替えに行った。すると、ドアの向こう側で戒が何やら重い口調で話し始めた。

「咲、さっき北島さんから電話があつてね。明日また話を伺いたいらしいんだ。だから、咲と里絵ちゃんの都合がよければ出かけるのは日曜日にしよう」

「うん、わかった。後で里絵に電話しておくね」

先ほどの戒の表情は、自分のことに気を使ってくれていたからだと思っていた咲は、明るい口調で返事をした。

夕食を終えると、咲は里絵に電話をかけて事情を説明した。

「里絵ちゃん、何て？」

戒が電話をかけ終えて戻ってきた咲に尋ねると、

「日曜日は都合が悪いらしくて、また今度誘ってだって」

咲は残念そうに答えた。

「そうか。里絵ちゃんには悪いことしたな」

戒は息をつき、申し訳なさそうな表情を浮かべた。

「きちんと埋め合わせしないとね」

「ああ、そうだね」

二人の間を少し重い空気が流れ始めた。すると、二人は黙ったまま、戒は食器を片付け始め、咲はお風呂を入れに行った。そうして、いつものように夜は更けていった。

翌日、二人が昼食を終え、戒が食器を片づけているとインターホンが鳴った。

「北島さんかな？」

戒はタオルで濡れた手を拭くと、玄関へと向かった。すると、咲は湯飲みを取り出し、お茶を入れる準備を始めた。

「こんにちは」

玄関の扉を開けると、北島が顔を覗かせた。

「お待ちしていました。中へどうぞ」

戒は北島と同行している二人の刑事を家の中に招き入れると、

「咲、北島さんたちが来られたよ」

声を上げて咲に知らせた。

「こんにちは、北島さん。今日は他の刑事さんも一緒なんですね」

咲はキッチンから顔を覗かせると、彼らを笑顔で迎え入れた。

「ええ、この後また捜査に向かわないといけませんから」

「大変ですね。すぐお茶を入れますからリビングでお待ちください」

咲はそう言つとキッチンに戻り、お茶を入れた。

「どうぞこちらへ」

戒は北島たちをリビングに案内すると、北島たちと戒は席に着いた。お茶を入れ終え、咲が席に着くと北島は早速、

「それで、その後体調のほうはどうですか？ 何度か倒れられたと伺いましたが」

咲の顔を窺いながら話しかけた。

「大丈夫ですよ」

咲は笑顔で答えると、北島も安心したのか穏やかな笑みを浮かべた。「それで、今日はこういったご用件でしょうか？」

戒が北島に尋ねると、北島は気まずそうな表情を浮かべ、言いにくそうに話し始めた。

「お二人は一昨日の一時頃、家にいらつしやいましたか？」

「一昨日ですか。二人とも家にいましたよ。私は部屋で仕事をしていましたし、咲はもう部屋で休んでいました。なぜですか？」

戒が眉をひそめると、北島は頭を掻きながら、更に難しそうな表情を浮かべた。

「実は、一昨日の事件現場で白いコートの少女が目撃されました。そんな北島の様子を見かねて、隣に座っている刑事が話をきり出した。

「白いコートの少女？ もしかして、咲が疑われているのですか？ 戒は突然疑いを掛けられたことに驚きを隠しきれず、ただ目を丸くして尋ねた。

「いえ、咲さんは第二の事件発生当時にアリバイがあります。ですから、容疑者ではなく、何か知っている、あるいは思い出した上で行動しているのではないかと思ひましてね」

北島が落ち着いた口調で戒に説明すると、

「咲さん、一昨日の夜のことを話していただけますか？」

次いで咲に尋ねた。

咲はうつむいたまま黙りこくっていた。戒の言うとおり自分は部屋で寝ていたと、何度も北島に弁明しようとしたが、事実として無意識のうちに夜な夜な出歩いていることや一昨日も知らず知らずの

うちに白いコートを着ていたことから自分の行動に自信が持てずにいたのである。

「咲さん？」

咲の様子を見ていた北島は、咲の顔を覗きこむように話しかけた。冷や汗をかき、目が泳いでいる咲を見て、不信感を抱いた北島は、警察署のほうでゆっくり話を伺うべく、その旨を咲と戒に伝えようと口を開いた。しかし、その言葉が発せられる前に、

「待ってください。咲は部屋で寝ていたと先ほどお話したでしょう？ 咲はあの事件以降、心が不安定になっているんです。今、言葉が出てこないのもそのためです」

戒は咲をかばうように説明した。北島は戒の目をジッと見つめると、再度咲の顔を覗きこんだ。

「精神科医として、咲の主治医として、これ以上の聴取は認められません」

戒が強い口調で付け加えると、

「……わかりました。しかし、白のコートは押収して調べさせていただきます」

専門家の意見を聞いた北島はこれ以上の聴取は危険であり無意味であると判断した。

「わかりました。コートは咲の部屋にありますので、すぐ持ってきます」

「いえ、こちらの者に取りに行かせます」

北島はそう言うと、隣に座っていた刑事にコートを取りに行かせた。

コートを押収し終え、刑事が戻ってくると、

「では、今日はこれで帰ります」

北島は戒と咲に向かって言うと、静かに席を立った。そして、北島が未だうつむいたままの咲を心配そうに見つめた。

「大丈夫です。突然のことで少し気が動転したのでしょう。少し休めば良くなりますから」

戒は悲しげな表情を浮かべながらも、北島にそっと微笑みかけた。

「すみません。しかし、我々は万一の可能性も捜査しなくてはいい
ませんので」

北島たちは軽く会釈をすると、戒に弁解した。

「わかっています」

戒はそう言うと、北島たちを玄関まで送った。

「手分けして二人を見張ってくれ。俺は目撃者に話を伺ってくる」

北島は車に乗り込むと、同行していた二人の刑事に指示を出し、
刑事二人を残して一人車を走らせた。

一方、北島たちを見送り、リビングに戻ってきた戒は、うつむい
たままの咲をそつと抱きかかえ、部屋へと連れて行った。そして、
咲をベッドに寝かせると、戒は咲の手をとり、なぜか静かに涙を流
した。

「北島さんたちは？」

頬に落ちた涙に反応して正気に戻った咲は疲れ果てたような顔で
戒に尋ねた。

「さつき帰ったよ」

戒の声を聞き、戒のほうを向いた咲は、戒が涙を流していることに
気づいた。

「何で泣いているの？」

咲もまたもらい泣きし、涙を流しながらも戒を笑いながら尋ねた。

戒は何度も首を横に振り、咲の手におでこを押し当てた。

「お兄ちゃん、もしかして私」

「咲、つまらないこと考えるな」

咲の言葉を遮るように戒が強い口調で言うと、

「ごめん。ごめんね」

咲は静かに目を閉じ、涙を流した。

夕陽がカーテンの隙間から差込み、二人を優しく包んだ。戒は咲
が眠るまで手を握り、傍にいた。咲は安心したのか、穏やかな表情
で眠りについた。

静寂

咲は北島の聴取以来、学校も休みがちになり、部屋に閉じこもるようになってしまった。直感で自分が連続殺人事件に関わりがあると感じていたのである。

咲は戒に自分の部屋に外側から鍵をかけるよう頼んだが、戒は第二の事件発生時に学校にいた咲が事件に関われるはずがないと、咲の要求を断った。しかし、不安が拭い去れない咲の様子を見て戒は、玄関に戒しか持たない鍵を取り付け、夜間施錠することで咲は納得した。

七月の初め、一週間学校に出てこなかった咲の様子を心配した里絵は、次の週から毎朝咲を迎えに来ていた。

「咲、学校行こう」

インターホンが鳴ると同時に玄関のほうから、いつものように里絵の声があった。

「おはよう、里絵ちゃん。いつもありがとうね」

「いいえ、良いんですよ」

戒は玄関の扉を開け、里絵と挨拶を交わした。

「咲、今着替えているから中で待っていてよ」

戒は家の中に里絵を招き入れた。すると、咲の部屋からはドタドタと慌しい物音が聞こえてきた。そして、その音が止み部屋が静かになると、バタンっと大きな音を立て、部屋のドアが開いた。

「ごめん、里絵。遅くなった」

咲の必死な顔を見ると、戒と里絵は目を見合わせ、声を上げて笑った。

「何よ？」

遠慮なく笑う二人を見て、咲は頬を膨らまして怒った素振りを見せた。

「ごめん、ごめん。だって、咲があまりにすごい顔で出てくるから」
里絵はお腹を抱え、笑いながらも慌てて弁解した。

「じゃあ、行こうか」

里絵は息を落ち着かせて言うと、咲は小さくうなずいた。

「じゃあ、お兄ちゃん。いつてくるね」

「ああ、気をつけて」

少し遅刻しそうだった二人は、家を出ると学校まで駆け足で向かった。

「咲ちゃん、里絵ちゃん、いつてらっしやい」

近所のおばさんに声をかけられると、その都度足を止め、

「いつてきます」

二人は声を合わせて答え、会釈をした。

「また付いてきているよ」

突然里絵が立ち止まり、後ろを振り向くと、人影が路地裏に入り込んだ。

「うん。この前、家に来た刑事さん。たぶん私が事件と何か関わりがあるんじゃないかって監視しているの」

咲はそう言うと、里絵の肩に手を置き、

「さあ、遅刻しちゃうよ」

里絵の身体を前に向かせると二人は再び走り始めた。

学校では咲の様子を気遣って献身的に接してくれる学生が多いが、少しおかしな子として、忌み避ける学生も増えていた。

その視線を感じると咲は時折悲しい気持ちがかみ上げてきたが、良くしてくれる仲間たちの前では決して笑顔を絶やすことはなかった。

「咲、帰ろう」

授業が終わると、咲と里絵は一緒に学校を出た。相変わらず咲を監視している刑事の姿を見て、

「このままでいいの？ 何にも悪いことしていないのに監視されるなんて不快じゃない。しかも、あんなバレバレの尾行」

里絵は咲に不満を漏らした。

「ボディーガードが付いていると思えばいいって、お兄ちゃんが」
咲は苦笑いをする、里絵は納得いかない表情を浮かべた。その表情を見た咲は里絵の頬をつねると、ニコツと笑いかけた。その顔を見た里絵は不気味に笑うと、

「撒こうか」

咲の手をとり、全力で走り始めた。そして、途中狭い路地に入った、民家の庭を横切ったりと走り回った。

咲は監視している刑事のことを気にかけてながらも、引つ張られるがままに、時には里絵追い抜いて引つ張りながら夕暮れの中をはしやぎながら走っていた。

二人が膝に手をつき、息を切らしていると、刑事が付いてきていないことに気がついた。

「やったね」

里絵は息を切らしながら言うと、咲に小さくピースをした。咲はそれを見ると、満面の笑みで応えた。

「いつも通りの咲だ」

里絵がホツとした表情を浮かべると、咲はそつと微笑んだ。

「心配かけてごめんね」

「ううん。それより、随分遠回りになっちゃったね」

「まあ、たまにはいいんじゃない」

二人は息を整えながら、戒のマンションへとゆっくりと歩いていった。

二人がマンションの近くまで来ると咲は急に立ち止まり、赤く染まった空を見上げた。

「どうしたの、咲？」

里絵が心配しながら声をかけると、

「私、明日から一人で学校行くね」

咲は里絵に微笑みかけた。

「何で？ 一緒に行こうよ」

「ううん。里絵に引つ張られたり、お兄ちゃんに押されたりしてじやなく、自分の足で歩きたいから」

「無理しないでね」

里絵は咲の強い意志を持った目を見ると、小さくうなずき微笑み返した。咲は笑みを浮かべながら深くうなずくと、里絵の背中をポンツと叩き、再び歩き始めた。すると、いつも二人が帰ってくる道から、咲を監視していた刑事が歩いて戻ってきた。

「あつ」

二人が声を上げて指差すと、その刑事はスツと電柱の陰に隠れた。

「あの刑事、ドラマの見すぎだよ。もうバレバレだって」

里絵が呆れ顔でその刑事に聞こえるように大きな声で言うと、

「かわいいじゃん」

咲は赤ん坊のようにクシャクシャな顔をして笑いながらその刑事に軽くお辞儀をした。

「ありがとね、里絵。じゃあ、明日学校で」

咲は里絵に手を振りながらマンションの階段を上っていった。里絵は咲が家の中に入るのを確認すると、電柱に隠れている刑事に向かってニヤリといやらしく満面笑みを浮かべて、大きく手を振って帰っていった。

咲が一人で登校するようになって二週間が経った。学校では期末テストも終わり、後は夏休みを待つだけとなっていた。

「咲、夏休みどこか行こうよ」

「そうだね、お兄ちゃんに頼んでおくね」

心配していた夢遊病の症状も七月に入ってからほとんど現れず、咲の精神状態は安定し始めていた。そのため、授業が終わると咲と里絵は下校しながら旅行の計画を立てていた。

「咲って、お兄ちゃん大好きだよ」

「うん」

「それって、恋愛感情で？」

満面の笑みで答える咲の顔を見て、里絵は咲の顔を窺いながら尋ねた。

「うっん、違うよ。お兄ちゃんとしてだよ」

咲は頬を赤らめ、慌てた様子で大きく首を横に振った。

「戒さんも同じ気持ちかな？」

里絵が少しうつむき加減で続けて言うと、

「当たり前でしょ。バカじゃないの？」

咲は怒鳴るような強い口調で言い放った。

「ごめん、そうだよ。当たり前だよ」

「そうだよ。当たり前だよ」

咲はカバンで里絵の腰を叩き、微笑んだ。

「さあ、帰ろう」

二人ゆっくりと歩き始めた。

それからしばらく、二人の間に妙な雰囲気立ち込め、沈黙が続いた。

「戒さんって恋人いるのかな」

唐突に言う里絵の頬が赤らんでいるのを見て、

「えー」

咲は驚きのあまり声を上げた。

「ふ、深い意味はないよ」

手をまごつかせながら、弁解するかのよう慌てた様子で言う里絵を見ると、咲はクスツと笑った。

「旅行、お兄ちゃんも誘おうね」

咲は里絵の肩に手を置き、優しく微笑みかけた。

「うん」

里絵は照れた表情を浮かべながら微笑み、咲の一步前を歩いていった。

咲は夕焼けに染まる里絵の頬を後方で穏やかな顔をして見つめていた。

家に帰ると、咲は夕飯の準備をし、戒の帰りを待った。そして、

戒が帰ってくると一緒に夕飯を済ませた。

「どうした？」

戒は、何だかそわそわしている咲を見て尋ねた。すると、咲は里絵との旅行の計画について話し始めた。

「お兄ちゃんも一緒に行こう」

咲は少しニヤつきながら誘った。

「……そうだね。高校生二人だけは心配だから、一緒に行こうかな」しばらく考えた後、戒は小さくうなずきながら答えた。

「やった。じゃあ、早速里絵に電話するね」

そう言くと、咲は急いで里絵に電話をかけに行った。戒はうれしそうにはしゃぐ咲を見て、優しく微笑むと、ゆっくりと席を立ち、夕飯の片づけを始めた。

その日の夜、部屋で眠っていた咲はどこから聞こえる物音に目を覚ました。

（お兄ちゃん、まだ仕事しているのかな）

咲は頭の中でつぶやくと、音を立てないように静かに部屋を出て行った。そして、リビングにほのかに灯りが点っているのを見ると、咲は足を忍ばせて近づき、そっと覗き込んだ。すると、リビングでは酒を飲みながら、悲しそうにうつむく戒の姿があった。

「哀、俺はどうすればいい？俺はまたしても君を……」

戒の口から哀の名が出た瞬間、またもや咲の心に悲しみが溢れ出した。

（この感じ、前にもあった）

胸を押さえながら壁にもたれ掛かった咲は、

（逃げちゃだめ）

と、必死に自分に言い聞かし、再度戒のほうに注意を向けた。

「奴にだけは君を渡せない」

戒はそう言くと、グラスを空け、テーブルに伏してしまった。

（お兄ちゃん、哀さんのことを知っている？）

一つの疑問が咲の頭を過ぎった瞬間、

「もう、苦しまないで」

咲は無意識のうちに言葉を発した。咲は自分の口から自然と発せられた言葉に驚いた。そして、その言葉と同時に自分のものとは別の感情が溢れてくるのを感じ、不安を覚えた。

（誰の想い？ 哀さん？）

さまざまな感情が自分の感情と交差し、胸が苦しくなってきた咲は、覚束ない足取りで部屋に戻り、ベッドに潜り込んだ。

出発

『また？』

暗闇の中で目を覚ました咲は、忽ち表情を曇らせた。しかし、これを機に咲は、哀に以前浮かんだ疑問を伺おうと考えた。

『哀さん』

咲が声を張り上げて言うと、暗闇の中、どこからともなく声が聞こえた。

『この前はごめんね。気持ちを抑えきれなくて』

『哀さんは私の中にいるのね？』

咲は辺りを見回しながら尋ねると、遠く姿を現した影は、静かに微笑んだ。

『時間は進むしか方向がないの。止まることも、戻ることもしかない。当たり前前の摂理に彼は逆らってしまった』

『彼って、お兄ちゃんのこと？』

咲は哀のもとへ駆け寄りながら尋ねた。

『私は見守ることしかできない。だから、あなたが最後まで笑顔で包んであげて』

咲は哀が立っていた場所に近づくと、影は次第に薄れてゆき、実像が見え始めた。

『哀さん？』

咲は彼女に触れようと手を伸ばそうとしたが、そこには大きな鏡が一枚立っており、制服姿の咲が映し出されているだけであった。

息を切らし、くやしそうにうつむく咲は、鏡に映っている制服が自分の学校のものではないことに気がついた。

（哀さん？）

咲は慌てて顔を上げたが、そこには確かに咲の顔が映し出されていた。

咲が目を丸くしていると、鏡の中の自分がゆっくりと口を開いた。

『今、彼に必要なのはあなたの笑顔。過去である私の笑顔ではなく、現在のあなたの笑顔。そして、願わくは未来まで』

そして、鏡の中の人物は悲しい瞳をしながらも聖母のように優しく微笑んだ。

『哀さんなの？』

咲は困惑しながらも鏡にゆっくりと手を伸ばした。しかし、咲が鏡に触れた瞬間、鏡は粉々に砕け、その破片が咲を包み込んだ。

『笑顔でいてあげて』

哀が穏やかな声でそう言うと、目映い光が乱反射しながら咲を暖かく包み込んだ。

咲は陽の光に包まれながら、いつになく穏やかな目覚めを迎えた。そして、咲はゆっくりと起き上がると、リビングへと向かった。すると、リビングでは戒と里絵が旅行パンフレットを広げながら、何やら楽しそうに話をしていた。

学校は夏休みに入ったため、いよいよ旅行の計画をたてようと、里絵は咲の家に訪れていたのである。

「おはよう、起こしてくれればいいのに」

「何度も起こしたよ。さあ、顔を洗っておいで」

眠い目を擦りながら言う咲に戒は呆れた表情を浮かべた。

「はい」

咲は気のない返事をする、ゆっくりと洗面所へと向かった。

三人は昼食を終えると、行き場所と日数、時間について話し始めた。

「お兄ちゃん、仕事はいつからどれくらい休みをとれるの？」

「八月の二日から三日間かな」

咲がパンフレットを眺めながら尋ねると、戒は自分の手帳を見ながら答えた。

「じゃあ、八月二日から二泊三日で」

里絵は手際よくチラシの裏にメモをした。

「場所は？」

戒が二人の顔を見て尋ねると、二人は互いの顔を見合わせ、

「沖縄」

決まっているといわんばかりに声を揃えて答えた。

その後、沖縄のどこにするかをあれこれ思案していると、自宅の電話が鳴り出した。戒が電話をとり、席を立つと、二人は思案を続けた。

「……はい。わかりました」

戒は暗いトーンのまま受話器を下ろした。そして、一息つくると戒はリビングへと戻っていった。

「誰？」

「ん、仕事の話」

咲が心配そうな表情で尋ねると、戒は咲の頭をポンツと叩き、席に着いた。

「で、場所は決まった？」

戒は話しを戻すように尋ねた。

「石垣島」

二人は再度声を合わせて答えた。

双子のように声を揃えて答える二人を見て、戒は思わず笑ってしまった。その顔を見た咲は、

『笑顔でいてあげてね』

という哀の言葉を思い出した。そして、咲は天使のような笑顔で戒に微笑んだ。里絵も二人につられるように自然と笑顔になっていた。

三人が宿泊場所を決め終える頃、陽が傾き始めていた。

「じゃあ、そろそろ帰ります」

里絵が席を立つと、

「送っていいこうか？」

何気なく戒は声をかけた。

「いえいえ、いいです。まだ明るいですし」

里絵は慌てた様子で答えた。

「じゃあ、今度はスケジュール決めだね。いつにしようか？」

その様子を見ていた咲はニヤニヤと笑いながら、玄関まで里絵を送りながら尋ねた。

「うーん。……戒さん、今度の休みはいつですか？」

里絵はしばらく考えた後、戒の様子を窺いながら尋ねた。

「明日はお客さんが見えるから、今度の休みは来週の木曜日かな」

「じゃあ、来週の木曜日がいい」

戒が里絵の目を見て答えると、里絵は笑顔で咲に答えた。咲はニタニタと笑いながらうなずいた。

「それじゃあ、お邪魔しました」

里絵は玄関の扉を開けて勢いよく駆けていった。

「明日、何時にお客さんが来るの？ 仕事の邪魔になるといけないから、私は里絵のところに行っているね」

二人がリビングに戻ると、咲は戒に気を利かせた。

「明日見えるお客さんは北島さんなんだ。コートを返しに来るって」
戒は表情を曇らせ、咲に話した。

「だから話し方が暗かったの？ 私はもう大丈夫だよ」

「……ああ、わかってるよ」

戒は不安な表情を浮かべたが、咲と目が合うと、二人は互いに互いを見て優しく微笑んだ。

「夕飯一緒に作るう」

咲は戒の背中を押してキッチンへと向かった。咲は幾度となくその背中に哀との関わりを問うとしたがその度に胸が苦しくなり、聞けずにいた。

「ん、どうかした？」

咲がボーっとした表情を浮かべていると、戒は振り向き咲に尋ねた。

「ううん、何でもなし。さあ、ご飯、ご飯」

咲は笑顔を浮かべてそう言うと、戒の背中を強く押した。

夕飯を終えると、いつものように夜が更けていった。

「咲、明日は早く起きてくるように」

「大丈夫。お兄ちゃんが起こしてくれるから」

強い口調で言う戒に対して咲は笑いながら答え、舌を出して部屋へと逃げていった。

「叩き起こしてやるからな」

戒は声を上げた。そして、戒も部屋に戻ると静かに床に就いた。

翌日、戒は息をつきながら咲を起こしに向かった。

「咲、いい加減起きなさい。北島さんはもう来ているよ」

「うん、もう起きる」

戒が咲を揺すり起こすと、咲は目をこすりながらゆっくりと起き上がった。

「顔洗って、着替えておいで」

戒は呆れた表情を浮かべると、リビングへと戻っていった。

咲は顔を洗い、着替え終わるとリビングへと向かった。

「北島さん、お久しぶりです」

「あ、どうも」

咲は椅子に座っている北島と会釈を交わした。

「この前はすみませんでした。その後、具合はどうですか？」

北島が心配そうに尋ねると、

「ええ、もう大丈夫です」

咲は落ち着いた口調で答えながら席に着いた。

「元氣すぎて困ってしまいます。よく寝るし」

お茶を運んできた戒が、横から口を入れた。

「もう、お兄ちゃん」

咲が恥ずかしそうな顔をしながら、戒の肩を叩きながら言うと、

「本当にお元氣そうだ」

北島は二人の元氣な顔を見て笑った。

「まずはこれをお返しします」

戒が席に着くと、北島はビニールに包まれた白いコートを差し出

した。

「何一つ疑わしいものは出てきませんでした」と続けると、咲と戒は安堵の表情を浮かべた。

「咲さん、その後事件のことで何か思い出したことはありませんか？」

北島は苦渋の表情を浮かべて咲に尋ねたが、咲は黙って首を横に振るだけであった。

「どんな些細なことでも構いません」

「すみません、本当に何も」

咲は哀のことを話そうかと考えたが、思いとどまった。哀が実在するのかわかさえわからなかったし、万一哀が実在し、哀が夢の中で言うことが真実であるとすれば、戒に迷惑が係るのではないかと考えたからである。

「捜査は難航しているようですね」

戒は北島の顔を見ると、静かに口を開いた。

「ええ。どうやら一件目と二、三件目とは使われた凶器が違うようです。その特定が難しくなっています。ここだけの話、もしかすると犯人が異なるのかもしれませんが。それに今回の事件は意図がわからない」

北島は戒のほうを見ると、くやしそうな表情を見せた。

「あの、私たち旅行に行く予定なんですけれど、気晴らしに北島さんも一緒に行きませんか？」

咲は突然話を切り出し、いつものように微笑みかけた。二人は一瞬啞然とすると、北島は声を上げて笑った。

「申し出はありがたいのですが、捜査がありますので」

「そうですね」

笑いながら北島が答えるのに対して、咲は残念そうに答えた。

「当たり前だろう」

戒は呆れた顔のため息をついた。

「じゃあ、私たちを監視している人たちはどうするんですか？」

「一人はついて行かせることになると思います」

咲が笑みを浮かべながら尋ねると、北島は申し訳なさそうに頭を掻いた。

「私たちはまだ疑われているのですか？」

戒は北島の言葉を聞くなり、顔を強張らせながら北島に尋ねた。すると、咲も悲しげな表情を浮かべながら北島の様子を窺った。

「疑っているわけではありませんよ。関連性の可能性が捨てきれない限りは、ということですよ」

北島は二人の顔を見ながら優しく微笑んだ。

（疑っているのと同じことだろう）

戒は納得のいかない表情を浮かべたが、

「わかりました。それじゃあ、スケジュールが決まったら連絡しますね。いちいち調べるのも手間でしょうから」

咲がすぐさま笑顔で答えたため、言葉にはしなかった。

「助かります。同行させるのは馴染みのあるほうがいいかと思うので咲さんを監視している小柳を行かせましょう。あいつはまだ二代ですから、こんなおじさんがついていくよりいいでしょう」

北島は不満げな表情の戒を横目にしながら、咲に優しく微笑んだ。

「では、今日はこの辺で帰ります。また、時折伺いますので」

「あ、はい」

咲が北島を見送るために席を立つと、戒も渋々席を立ち見送った。

「もう、お兄ちゃん」

咲は相変わらず不満そうな表情を浮かべている戒の横腹を突つつくと、恥ずかしそうに笑った。すると、北島も苦笑を浮かべた。

「一刻も早く事件を解決しますので、それまで辛抱ください」

「すみません、少し大人気なかつたですね。捜査、頑張ってください
い」

北島が戒に対して深く頭を下げると、戒は笑顔を作りながら北島に答えた。すると、北島もそっと微笑みながら軽く頭を下げた。

「それでは、失礼します。旅行、楽しんできてください」

「はい。ご苦労様でした」

ボタンつと玄関の扉が閉まると、戒は頬を引きつらせながら咲に笑いかけた。すると、咲は呆れた表情を浮かべ、何も言わずにリビングのほうへと歩いていった。戒は咲を怒らせてしまったと思い、頭を掻きながら咲の後へと続いた。

「北島さん、仕事できているのよ」

「わかってているよ」

やはり怒った口調で言う咲に、戒は恐縮しながら答えると、

「子供ね」

咲は振り向き、戒にイーっとして見せた。

「だよな」

戒は北島に対して申し訳なさそうな表情を浮かべると、髪をクシヤクシヤに掻きむしった。

北島が訪れた次の週、宿泊場所とスケジュールを決めるために里絵は朝早くから戒の家に訪れた。

（咲はまだ寝ているかな？）

里絵が薄ら笑みを浮かべながらインターホンを鳴らすと、しばらくして玄関の扉が開いた。

「おはようございます」

里絵が元気よく挨拶をすると、玄関の扉を開けたのは咲であった。

「なんだ、咲か」

「なんだとはなんだ」

残念そうに言う里絵を見て、咲は腰に手を置き、頬を膨らませた。

「あ、いや、咲、いつも寝ているから」

里絵は慌てて弁解をした。

「ごめんね、お兄ちゃんじゃなくて」

「だから」

頬を赤らめる里絵を見て、咲はクスツと笑うと、

「さあ、どうぞ。お兄ちゃんがお待ちですよ」

咲は里絵を家の中へと招き入れた。

そして、二人がリビングに行く、戒がテーブルを拭いていた。すると、咲はニヤリと笑い、里絵の背中を押した。

「おはよう、里絵ちゃん」

「あ、おはようございます」

勢いよくリビングに入ってきた里絵を戒が笑顔で向かえ入れると、里絵は頬を赤らめたまま笑顔で応えた。

「さあ、席に着いて。咲も」

二人は戒の声で席に着いた。

「じゃーん、パンフレット集めておいたんだ」

「私も」

咲と里絵が集めたパンフレットを広げると、三人は宿泊場所とスケジュールを決め始めた。

「泊まる場所は？」

戒が二人に尋ねると、二人は目を見合わせて、

「ここ」

と、パンフレットに記載されている一つの宿を指差した。

「民宿マブヤか」

「うん。海に面していて景色が綺麗なんだって」

戒は怪しげな名前だと感じつつも、二人が強く推薦するため、民宿はそこに決定した。

「じゃあ、後は向こうで何をするかを大まかでいいから決めておこうか？」

「ダイビング」

戒の問いに二人はすぐさま声を揃えて答えた。

「本当に仲がいいね」

最近、あまりにも声が揃うことが多いため、戒は二人を見て思わず笑った。

三人はある程度スケジュールを決め終わると、必要なものを買揃えるために、暑い陽射しの中、近くのショッピングモールへと買

い物に出かけた。必要なものといつても三人で選ぶのは旅行カバン程度で、残りは咲と里絵の水着や衣服が中心であるため、戒は居場所を無くしていた。

「俺、必要ないんじゃない？」

「だめ。荷物が持ちきれないもん」

荷物持ちのために連れてきたと言わんばかりの咲の一言を聞き、思わず戒はため息をついた。

「すみません」

里絵は苦笑を浮かべながら、戒に一声かけた。

「いいよ、別に」

戒が里絵に微笑みかけると、

「さあ、次行くよ」

咲は二人の背中を押し、洋服屋に入っていった。

陽が傾き始めると、買い物客の数が急にひき始めた。

「夕飯、家で食べていこうよ」

咲は里絵を誘いながら戒の顔を窺った。

「里絵ちゃんさえよければ、食べていって」

「じゃあ、よろこんで」

戒の言葉を聞くと、里絵は笑顔で答えた。

一通り旅行の買い物を終え、ついでに夕飯の買い物もすると、いよいよ大荷物になってしまった。

「買いすぎだね」

里絵が両手に荷物を抱えながら言うと、戒は汗を流しながら苦笑いをした。

「旅行に行くまでにお金がなくなるな」

「何とかなる。それより、今はこの荷物をなんとかしないとね」

強気で発言をした咲は、突然後ろを振り向くと、

「小柳さん」

両手の荷物を下に置き、大きな声を上げ、手を振った。

「おい、咲。やめなさい」

戒は咲の考えを見抜くと、必死に咲を制止した。

夕暮れの中、荷物を持ち歩いてゆく影は四つに増えていた。

「咲、何か性格変わったよね」

「そう?」

咲は里絵の顔を見ると、首を傾げた。

「うん。大胆になったというか、たくましくなったというか」

咲と里絵は自分の旅行カバンを一つだけ手に持ち、足早に歩いていった。

「すみません、咲が無茶を言って」

「いいえ、構いません。それより、北島さんには内緒にしといてくださいね」

一方、戒と小柳は両手一杯に荷物を抱えると、足元を確認するように一歩一歩足を運んだ。

「小柳さんもよかつたら家で夕飯を召し上がりませんか?」

家の前まで来ると、咲は小柳の荷物を受け取りながら夕飯に誘った。

「いえ、仕事ですからそういう訳にはいきません」

小柳は戸惑いの表情を浮かべながらも真面目に答えた。

「そうですか」

「当たり前だろう」

戒は呆れ顔で咲の頭を小突いた。

「それでは、失礼します」

小柳はクスツと笑うと荷物を咲と里絵に返し、逃げるように立ち去っていった。

「さあ、帰ろう。夕飯を作らないと」

戒は二人を持っていく荷物で押すと、階段を上っていった。

「ありがとうございます」

咲は小柳に一礼すると、赤ん坊のようにクシャクシャな顔をして、满面笑みを浮かべた。三人は咲のほうを見ると、夕焼けに染まる咲のその笑顔に心を打たれ、しばし見とれた。

夕飯を終え、三人はお茶をすすりながらしばし雑談を楽しんだ。

「じゃあ、遅くならないうちに帰るね」

里絵はそう言うと、席を立った。

「えー、泊まっただらいいじゃん」

「うん、でも旅行に持っていく荷物をまとめたいし、宿題もある程度は進めておきたいから」

テーブルにうな垂れる咲を見て、戒はクスツと笑った。

「咲も見習いなさい」

戒は席を立つと、

「もう暗いから送っていくよ。荷物もあるし」

里絵にそつと微笑んだ。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

戒は里絵の荷物を持つと、二人は玄関に向かった。咲も重い腰を上げると、里絵の見送りに行った。

「じゃあ、今度は旅行の日だね」

「うん」

こんな些細な別れのときでさえ、咲は寂しそうな表情を浮かべた。

「里絵ちゃん、行こうか。咲、鍵は閉めておきなさい」

「わかった」

戒は玄関の扉を開けると、里絵と戒は家を出た。

「さて、私も宿題を減らしときますか」

咲は玄関の鍵を閉めると、自分の部屋へと入っていった。

旅行当日の朝、咲と戒はタクシーに荷物を乗せ、里絵が来るのを待った。

「荷物があるから迎えにいったほうがよかったんじゃないか？」

「あ、そうだね」

咲はハツとした表情を浮かべた。その顔を見た戒は横でクスクス笑った。

それからしばらく待つと、里絵がカバンを両手で持ちながら走っ

てやってきた。

「ごめん、ちよつと遅れた」

里絵は息を切らしながら言つと、カバンを地面に置き、呼吸を整えた。

「おはよう」

二人が薄ら笑みを浮かべながら里絵に声をかけると、

「おはようございます」

里絵は未だ呼吸が整わないまま返事をした。

「じゃあ、行こうか」

戒は里絵のカバンをタクシーに載せると、二人にタクシーに乗るよと言つた。そして、三人がタクシーに乗り込むと、タクシーは静かに発進した。

また、それと同時に後ろにタクシーが止まり、小柳は慌てて乗り込むと、咲たちの乗るタクシーについていった。

「一緒に乗ればいいのにね」

咲は後ろを見ながらクスクス笑いながら言つた。

「あれが仕事だからそういう訳にもいかないんだろう」

戒はそう言つと、

「後ろの車を撒かないようにお願いします」

戒はタクシーの運転手をお願いした。

あまりに滑稽な注文に運転手が目を丸くしているのを見て、咲と里絵は声を押し殺して笑つた。

刻印

飛行機と船を乗り継ぐこと二時間、三人は民宿マブヤに到着した。「いらっしやいませ、春日様でいらっしやいますね」

「はい。お世話になります」

一通り挨拶を済ませると、三人は部屋へと案内された。その部屋は窓から海が一望でき、三人はしばしその景色に見とれた。

「そこからは夕陽が沈む様子がご覧になれますよ」

「へー、ロマンチック」

咲と里絵はイメージを膨らませ、口元を緩ませた。

「お食事は、朝七時から九時と夕方十八時から二十時までとなっております。お風呂は十七時から二十二時まで、男女別となっております。それでは、ごゆっくりどうぞ」

従業員は一通り説明を終えると、一礼をして部屋を後にした。

三人はしばらく部屋でくつろいだ後、とりあえず辺りを散歩することにした。

「あれ、かわいくない？」

「うん、かわいいね」

咲と里絵は蛙がサーフィンをしている置物を見つけると、土産屋に駆け寄った。

「もうお土産買うの？」

戒はゆっくりと二人に歩み寄った。

「どうしようかな？」

「いいのがあったら買うかもしれないね」

二人が話しているのを聞き、

（また、荷物持ちか）

戒は苦笑を浮かべた。そして、案の定二人は結局お土産屋さんで買い物をする事となった。そして、一通り買い物を終えると、海に夕陽が沈むのを眺めながら三人は海沿いを歩いて民宿に戻っていつ

た。

民宿に戻ると夕飯の支度がされていた。

「うわー、豪華」

海の幸から沖縄名物まで民宿料理とは思えない豪勢な料理が並んでいるのを見て、咲は瞳を輝かせた。

「初日だけですよ」

民宿の女将は咲に微笑みかけた。そして、三人は席に着くと早速料理に箸を入れた。

食事を終え、部屋に戻ると咲と里絵はすぐさま風呂へと向かった。戒は部屋に残り少し休むことにした。

「ここもまた綺麗」

「食事といい、お風呂といい、いい民宿だね」

二人は風呂に入ると、それから些細な話で盛り上がった。

風呂から上がり、二人が部屋の近くまでくると、戒が風呂に入る支度を整え、部屋から出てきた。

「お兄ちゃん、お風呂もいい感じだよ」

「へー、それは楽しみだ」

戒は子供のように笑いながら、小走りで風呂へと向かった。咲たちは部屋に戻ると、里絵はドライヤーで髪を乾かし、咲はタオルで髪を拭きながら窓を開け、星を眺めた。

しばらくすると、咲は誰かが浜を歩いているのに気がついた。咲はクスツと笑うと、

「ちよつと外を歩いてくるね」

里絵に一言告げ、ニコニコ笑みを浮かべながら部屋を出て行った。

「一人は危ないよ」

「大丈夫。私にはボディガードが付いているから」

里絵は咲の言葉の意味を理解すると、ニヤリと笑い咲の背中を見送った。

咲は民宿を出ると、浜まで歩いていった。

「監視してなくていいんですか？」

咲は浜を歩いている小柳に話しかけながら、ゆっくりと近づいた。

「すまないね。折角の旅行なのに刑事が監視していたら羽が伸ばせないだろう」

「いいえ。十分楽しんでますし、楽しみますから安心してください」

咲が優しく微笑みかけると、小柳は一瞬咲の笑顔に見とれた。すると、小柳はみるみる頬を赤らめ、咲から目を逸らした。

「座って少しお話しませんか？」

その様子をみた咲はクスツと笑うと、砂浜に腰を下ろした。そして、二人はしばし何気ない話で盛り上がった。

「明日から一緒に行動しませんか？ そのほうが監視もしやすいでしょうし」

「……正直、君は監視する必要がないと思っている。でも、これが仕事だし、万一のため感情移入を避けたいんだ」

小柳はうつむきながら冷たく言い放つと、咲は黙ったまま突然立ち上がった。

「バカ」

咲は一言悲しげな表情で言うと、黙ってその場から走り去った。小柳はハツとして振り返り、走り去る咲の背中に慌てて声をかけようとしたが、掛ける言葉が何一つ出てこなかった。

風呂から上がり、部屋に戻ってきていた戒はその様子を窓から眺めていた。小柳に向けられるその眼があまりに冷ややかで、一緒に部屋にいた里絵は一瞬寒気を覚えた。

しかし、咲が部屋に戻ってくると、戒はいつものように優しい笑顔で微笑みかけた。咲もまた微笑み返すと、部屋の雰囲気は穏やかになり、里絵も安心したのか三人はゆったりと夜を過ごした。

翌日は咲と里絵が希望していたダイビングをすることとなった。

三人は昼食を終えると戒があらかじめ調べておいた、ダイビングの資格を持たない初心者でも潜ることができる施設へと移動した。

その施設は民宿から歩いて行ける距離にあり、しかも海沿いにあるために移動の便はよかった。

「念願のダイビングだよ。ダイビング」

「楽しみだね」

咲と里絵はキャツキャツとはしゃぎながら戒の後ろをついて施設の中へと入っていった。戒はダイビングにあまり興味がないらしく、咲と里絵は受付を済ませると、二人でインストラクターの指導の下、複数名と一緒に講習を受けることとなった。

「では、浅瀬で練習してみしよう」

講習が終わるとインストラクター先導の下、咲たちは海に向かった。

「うわー、綺麗」

咲は光り輝く海に瞳を輝かせた。

「咲、早く練習しよう」

里絵に手を引かれて咲は海に入っていた。

しばらくして、咲たちは船に乗って沖へと移動した。

「では、潜りましょうか？」

インストラクターの許可が下りると、複数名は慣れた感じで一斉に海の中へ飛び込んだ。

「私たちも行こう」

咲は少し緊張し気味の里絵の手を引くと、優しく微笑みかけた。

「う、うん」

里絵は咲に先導されるがまま海に飛び込んだ。

海に入ると魚の群れが咲たちの目の前を通り過ぎていった。咲たちは瞳を輝かせ、互いに互いを見て微笑むと、手を繋いだまま魚の群れを追いかけた。

一方、小柳は咲たちが船に乗って移動するのを木陰からそつと見送ると、浜に出てきて腰を下ろした。そして、思いつめた表情でうつむき、時折ため息をついた。

「監視役なのにこんなところにいるいいんですか？」

戒は後ろから声をかけると、振り返る小柳に缶ジュースを手渡し、横に腰を下ろした。

「彼女の笑顔を見る度に彼女を監視している自分に罪の意識を覚えます。」

小柳はうつむいたまま力強く言った。

「じゃあ、監視なんて止めて一緒に楽しみませんか？」

戒が優しく微笑みかけると、小柳はその顔に咲の笑顔を重ねり合わせた。

「彼女の笑顔は春日さんがいてのものかもしれませんね」

小柳は寂しそうな表情を浮かべながらも笑顔を作りながら小さくつぶやいた。

しばらく沈黙が続くと、咲たちの乗った船が戻ってきた。

「仕事に戻ります」

小柳はそう言うのと静かに立ち上がった。

「そうですか。……小柳さん、これからも咲を見守ってあげてください」

戒の言葉を聞くと、小柳は小さくうなずき、その場を去っていった。

「お兄ちゃん」

戒のもとに駆け寄る咲は、小柳の背中を見て足を止め、悲しげな表情を浮かべた。

「楽しかった？」

「うん。海はすごく澄んでいたし、魚の群れが目の前を通っていくのなんてもう絶景」

戒が穏やかな顔をして尋ねると、咲は沖縄の海のように輝いた瞳で答えた。

「咲、自分の荷物くらい持ってよ」

後方から走ってくる里絵は二人分の荷物を抱えていた。

「こら、咲」

戒は咲の頭をコツンと叩くと、里絵に歩み寄り二人の荷物を持った。

「あ、すみません」

里絵がニコツと笑うと、戒も優しく微笑み返した。その様子を見て咲が冷やかすようにニタニタ笑っていると、戒は咲の荷物だけをその場に置き、

「さあ、里絵ちゃん。施設に戻って着替えようか」と、里絵と一緒に歩いていった。

「あーん、お兄ちゃん」

咲は荷物を手にすると甘えた声で戒のもとへと駆け寄った。戒は満足気に微笑むと咲の荷物を持ち、三人は施設へと歩いていった。

そうして、三人が民宿に戻る頃、すでに夕陽が傾いていた。

「おかえりなさい。ダイビングのほうはいかがでした？」

「もう、最高でしたよ。沖縄の海は本当に美しいですね」

咲は今日感じた感動を必死に伝えた。

「お疲れのところすみません。夕飯の支度が少し遅れそうなものですから、部屋でお待ちいただけますか？」

従業員との話も盛り上がり上がった頃、女将が申し訳なさそうな表情を浮かべながら咲たちのもとにやって来た。

「わかりました。出来たら呼んでいただけますか？」

「畏まりました」

戒が優しく微笑むと、女将は丁寧に答えて小さく頭を下げた。すると、戒は荷物を持ち直し、三人は部屋へと戻っていった。そして、三人は夕飯の時間まで部屋でしばし休息することにした。

部屋に戻り、咲と里絵は一通りダイビングの感動を戒に伝えると、咲はぼんやりと沈む夕陽を眺めていた。人が浜を歩く姿を見てはすぐさま反応するその姿は、まるで誰かを探しているようにも見えた。そんな夕陽に染まる咲の横顔を戒はただ静かに寂しそうに見つめていた。すると、トントントンと扉をノックする音が聞こえた。

「お食事の支度ができました」

「はい。すぐ行きます」

戒は返事をし、ゆっくりと立ち上がった。

「夕飯、夕飯」

咲は大きく伸びをすると、笑顔を作りゆつくりと立ち上がった。そして、三人は食堂へと向かった。

夕飯を終えると、昨夜同様に咲と里絵は風呂場へと直行した。

「ダイビングしようか？」

咲は他の宿泊客がないことをいい事に、子供のようにはしゃいだ。そして、身体が温まると、のぼせる前に風呂を上がった。

「ジューズ買ってくるね。咲は何がいい？」

「じゃあ、コーヒー」

里絵が民宿のすぐ外にある自販機に向かうと、咲は先に部屋へと戻っていった。すると、部屋の灯りが点いていないことに気がついた。（お兄ちゃん、お風呂かな？）

咲が静かに扉を開けると、部屋の奥から何やら話し声が聞こえた。

「クツクツク。お前がどんなにあの娘を想おうとも、あの娘は違う男に惹かれている。いい加減、あの娘を引き渡せ。そうすればすべてを楽にしてやる」

「お前にさえ渡らなければそれでも構わないさ。どの道、俺にはその資格がない」

部屋の中に入った咲は、戒以外の誰もいないはずの部屋から野太く不気味な声を聞くと、驚きのあまり勢いよく扉を閉めた。

「誰がいるのか？」

「……咲」

戒が強い口調で問うと、咲は震えるような声で答え、ゆつくりと奥へと入っていった。そして、部屋の中を見渡し、戒のほかに誰一人いないことを確認した。

「ねえ、誰と話していたの？」

咲は少し怯えた表情で戒に尋ねた。

「ん、携帯電話で仕事関係の人と話していたんだ。クライアントのことで少しもめていてね」

戒は穏やかな表情で微笑みかけたが、咲は疑念を拭い去れなかった。「お兄ちゃん」

咲は深く追求しようと口を開いた。

「さあ、お風呂に入ろうかな」

戒は咲の様子を察すると逃げるように部屋を立ち去った。すると、咲は一人静かに暗い部屋でうつむいた。

『笑顔でいてあげてね』

哀の声が頭に響くと、

「うん。わかっているよ」

咲は小さくうなずき、答えた。

戒が風呂から上がり部屋に戻ると、咲は笑顔で迎え入れた。

「明日は三時に民宿を出るから」

戒は二人の横に座ると、頭をタオルで拭きながら話しかけた。

「三時か。おみやげを買いに行ったら終わりかな？」

里絵は咲の顔を窺った。

「でも、最後に少し泳ぎたいよね」

咲は里絵の方を見ると、戒の顔をチラッと見た。

「じゃあ、朝おみやげを買って、昼食を食べたら少し泳いで帰る。

これでどう？」

戒が二人に提案すると二人は笑顔で首を立てに振った。そして、三人はしばらく雑談を楽しんだ。

「今日は少し疲れたなあ」

夜も更けると、咲はあくびをしながら言った。

「じゃあ、明日に備えてもう寝ようか」

里絵はニヤリと笑うと横に敷いてある布団を咲に被せた。咲はそのまま里絵に覆いかかり、二人は猫のようにじゃれ合った。

「はい、灯り消すよ」

戒は呆れた顔を見ると、部屋の電気を切った。

翌朝、戒に叩き起こされると咲たちは予定通り買い物に出かけた。店に入る度に必ず荷物が増えてゆき、戒の両手は二人の荷物でみるみる塞がっていった。

「もう持てないよ」

咲が雑貨屋に入ろうとすると、戒が敵わず声を上げた。

「大丈夫ですよ。いざとなったら、後ろにもう一人いますから。ね、咲」

里絵が咲に笑いかけると、咲は一瞬表情を曇らせた。しかし、すぐさま笑顔を作り、

「大丈夫。ここからは自分で持つから」

二人に微笑みかけると、まるで誰かから隠れるようにうつむきながら店の中に入っていた。戒は静かに目を閉じ、ため息をついた。しかし、その様子を悲しそうに見つめる里絵の視線に気づくと、優しく微笑みかけた。

「さあ、入ろうか」

戒は里絵を先導して店の中に入っていた。

買い物を終えると三人は民宿へと戻り、沖縄で最後の昼食を摂った。そして、咲と里絵は水着に着替えると腰の重い戒を部屋に残して海へと駆けていった。

咲と里絵は民宿で借りたスノーケルを装着すると、海へと飛び込んだ。そして、咲たちは魚たちとの最後の遊泳を楽しんだ。

しばらくして咲は陸に上がると、戒がまだ来ていないことに気がついた。

(もう、最後の日なのに)

咲は呆れ顔で息をつく、浜に上がった。そして、持ってきていた白いコートを羽織ると、一人波打ち際を歩いて回った。時々顔を見せる里絵に足元押し寄せる波を蹴り上げては、里絵に水をかけられてと、二人は穏やかな時間を過ごした。

戒は部屋で帰りの支度をし、しばし休息をすると渋々海辺へと向かった。すると、戒は木陰から咲を寂しそうに見つめる小柳の姿を見つけた。戒はそつと背後から小柳に近寄ると、静かな口調で話しかけた。

「あなたは咲よりも仕事のほうが大事なようだ」

「……」

小柳は一旦振り返り、戒の顔を見るとうつむき黙り込んだ。

「あなたがどういう想いを抱いているかは関係ない。ただ、咲に悲しい想いをさせないで頂きたい。あいつに似合うのは笑顔であって涙ではない」

戒は険しい表情で静かに言い放つと、咲のいる浜へと向かおうと足を向けた。

「あなたは彼女をどう想っているのですか？」

戒は小柳の言葉に足を止めた。

「彼女は私のすべてです」

戒は堂々と答えると波打ち際で遊ぶ咲の姿をまっすぐ見つめた。

「……すべてですか」

小柳の煮え切らない態度に戒は苛立ちを浮かべた。

「最後まで咲は私が守ります。誰の手にも渡さない」

「最後まで？ どういう意味ですか？」

戒の言葉に小柳は頭をひねった。

しばらく沈黙が続いた。戒はそれ以上何も言わずに黙って歩き始めた。

「ちょっと待って」

小柳が声をかけると同時に小柳の携帯電話が鳴った。戒は振り返ることなく咲のもとへ向かった。

「お兄ちゃん」

戒がこちらに歩いてくるのを見かけると、咲は大きく手を振った。すると、戒が鼻を掻きながら照れた表情を浮かべたため、咲は満面に笑みを浮かべた。

「お兄ちゃん、最後まで一緒に泳ごう」

海に来たというのに向に泳ごうとしない戒に声をかけた。しかし、戒はただ首を横に振るだけであった。

痺れを切らした咲は戒の手を引こうと戒のもとに駆け寄ろうとした。しかし、その瞬間左胸が急に苦しくなり、咲は胸を押さえたま

まその場につづくまった。

「咲？」

戒は慌てて咲に駆け寄ると、咲を仰向けにして上半身を起こした。里絵も戒の声に反応し、咲のもとに駆け寄った。すると、血が滲むように咲の胸元に刺青が徐々に浮かび上がってきていた。

戒はそれが鳴海と同じ刺青であるとわかると、

「刺青のことは誰にも言うな」

鬼のような形相で里絵に強く念を押しした。そして、戒は刺青を隠すためにコートのボタンを閉めると、抱え上げて民宿へと戻っていった。

咲は薄暗い部屋の中、布一枚を身体に巻きつけた状態で祭壇に拘束されていた。

（ここはどこ？ また夢の中？）

咲が冷静に状況を把握しようと思いを巡らしていると、咲は数人に取り囲まれていることに気がついた。

『誰？ ここはどこ？ お願い、放して』

咲が必死に訴えかけても誰一人声を発することなく、ただ左胸に右手を置いて瞑想をしていた。

その異様な光景に恐怖を覚えながらも咲は目を凝らして注意深く観察した。すると、その人たちの左胸には鳴海と同じような刺青が彫られていた。左胸だけではなく、床にも文字のようなものが描かれており、その模様はテレビなどで見るような魔方陣によく似ていた。

（何これ？ 怖いよ。夢なら早くさめて）

その中心で拘束されている咲は、心の中で必死に叫んだ。しかし、その想いも届かず、司祭のように神々しい衣装に面をつけた人物がゆっくりと咲に歩み寄った。そして、その者は咲の胸に手をかざしながら言葉を発し始めた。

『集いし我ら六名の命を楔として、悪魔との契約のもとにこの娘の

魂をこの世に繋ぎ留めるものとする』

そして、その者は奇妙な呪文のような言葉を唱え始めた。咲は異様な雰囲気、滝のように冷や汗を流し、恐怖でもうろうとする意識の中、唯一日本語で話された言葉の意味を考えた。

『悪魔よ。彼ら刻みし胸の刻印を五芒星の鎖とし、この娘の魂を黄泉返らせよ。そして、我が胸の刻印とこれより刻む彼女の刻印をこの娘の魂の楔とせよ』

その者は両手を広げて天を仰ぐと、祭壇の四方にあるたいまつの一つから、火にくべてある小刀を取り出した。

(悪魔？ 何言っているの？)

恐怖で声が出なくなつた咲は、

(もうやめて)

必死に首を横に振つた。司祭のような人物はそれに気がつかないのかそれを見ぬ振りしているのか、無言のまま小刀を咲の胸元に近づけた。

『Great Earth Mother Blessed Be
Grimoire Guerir.』

呪文のような言葉を咲の耳元でつぶやくと、その人物は咲の胸に刻印を刻み始めた。

『いやー』

苦痛に思わず身体を反らせると、咲を取り囲む五名の中に咲の目には見慣れた人物の姿が映つた。

『お父さん』

暗がりにつつむいていたが、間違えるはずのない鳴海の姿に、咲は困惑しつつも救済の声を上げた。しかし、鳴海は左胸に手を置いたまま動作一つすることはなかった。

『悪魔との契約のもと、黄泉返りはここに成る』

咲は左胸に刻まれた刺青を見ると、極度の恐怖から意識を失つた。

陽が沈みかかる頃、咲が意識を取り戻すと小柳の声が聞こえた。

（よかった。やっぱり、夢だったのね）

咲は安堵の表情で一息つくくと、

（小柳さん、心配して来てくれたのかな）

嬉しく思いつつ眠った振りをしながら、そつと聞き耳を立てた。

「十四時頃、川本さんが意識を失う少し前に北海道の富良野で四人目の犠牲者が出ました。今回も刺青を断ち切るかのように刃物が左胸に入っていたそうです」

（よかった。やっぱりお兄ちゃんは事件に関係していなかったんだ。）

少なからず戒に疑いを向けていた咲は再び安堵の表情を浮かべた。

「では、監視を解いて東京に戻ってくるよう北島刑事に言われているので、失礼します」

小柳が静かに立ち上がると、里絵は冷ややかな視線を送った。

「咲の意識が戻ることを確認せずに帰られるのですか？ その程度の想いならばもう咲には近づかないでください。あなたでは咲を支えられない」

戒は咲の顔を見つめながら落ち着いた口調で小柳に言った。

「……わかりました」

小柳は悲しそうな表情を浮かべながらもはつきりと答えると、静かに部屋を出て行った。扉が閉まる音を聞くと咲はゆっくりと目を開けた。すると、咲の目からは涙が溢れ出た。

「起きていたのか？」

「う、うん」

悲痛な表情を浮かべる戒を横目に、咲はしばらくの間天井を見つめたまま、黙って涙を流し続けた。

翌朝、戒の仕事を気遣って、咲たちは昼の便で帰ることにした。

「無理することはないよ。連絡してあるからもう一泊したって構わない」

タクシーに荷物を載せる咲に戒は心配そうな表情で声かけた。

「もう、大丈夫。だから帰ろう」

咲は笑顔で答えると、戒が持っていた荷物もタクシーに載せた。その表情を見た戒は咲の意思を尊重することに決め、

「わかった。帰ろう」

咲の肩に手を掛け、タクシーに乗り込んだ。

「ごめんね、里絵。楽しい旅行のはずだったのに、最後に大変な想いをさせちゃって」

「ううん、気にしないで。旅行、楽しかったよ」

笑顔で答える里絵を見て咲は気が緩んだのか、自然と涙が咲の頬を伝った。

「ごめんね」

うつむき涙を流す咲を里絵はただ黙って抱き寄せた。そして、一通り涙を流した咲は、いつも通りの笑顔で、里絵と思い出話をしながら東京へと帰っていった。

帰郷

旅行を終え、咲たちが戒のマンションに帰ってから一週間ほど経った。

戒や里絵の前では、咲はいつものように明るく振舞っていたが、内心ではひどく脅えていた。連続殺人の被害者は皆、左胸に刺青を持つ者であり、次は自分が殺されるのではないかと考えていたからである。

「お兄ちゃん、私も殺されるのかな？」

ある日、咲は自分一人で抱え込むには重すぎる不安を戒に問いかけた。

「何を言い出すんだ？ 咲の刺青はあの日突然浮かび上がったものだろう。それを知っているのは俺と里絵ちゃんだけ。どうしたら犯人が知ることが出来る？」

戒が言うように犯人が咲の刺青のことを知ることはありえないことである。それは頭では理解できていたが、咲は他者と接触することを恐れ、また、一人になることを恐れた。そんな咲を見かねて、毎日のように里絵がマンションにやってきた。そして、戒が仕事で外出しているときはなるべく咲の傍にるようにした。

「ごめんね、里絵。折角の夏休みなのに、こんな私のために」

「いいよ、別に。好きで来ているだけだから」

里絵が優しく接するほど咲の胸はきつく締付けられた。

「ごめんね。ごめんね」

咲の眼からは自然と涙がこぼれ落ちた。

戒が休みのときはしばし三人でショッピングに出かけた。しかし、不安を拭い去れない咲は、終始戒の手を離さずに行動していた。

「あの服かわいいね」

咲は戒の手を引っ張ると店内へと入っていった。すると、里絵はその様子を寂しそうに見つめながら、後方をゆっくりと歩いてついて

いった。

「里絵、早く」

「う、うん」

里絵は咲の笑顔に自分も笑顔で応えるが、前ほど心から笑いかけることができなくなっていた。先日の旅行先での咲に対する戒の態度や言動、不安があるとはいえ咲が戒に甘える様子、さまざまなこと

で咲に嫉妬心を抱いていた。

「私、必要あるのかな？」

里絵は一人つぶやきながらも咲のもとに駆けていった。
それから里絵は咲に対して胸に支えるものを感じながらも大好きな親友のためにマンションに訪れてはいつも通りに笑顔で接した。

八月の中旬、その日もまた里絵は暑い日差しの中、戒のマンションに訪れた。そして、咲は里絵と家の中でファッション誌を見たりして一日を過ごした。

「ただいま」

夕方になり戒が帰ってくると、咲と里絵は二人で出迎えた。

「里絵ちゃん、こんにちは」

「こんにちは」

三人はリビングへ戻ると席に着いた。すると、里絵は何やら思い詰めた表情で押し黙っていた。その様子を見ていた咲と戒が互いの目を見合わせて首を傾げると、里絵はとうとう重い口を開いた。

「あ、あのね」

あまりに深刻そうな表情で話すので、咲と戒は少し表情を強張らせて身構えた。

「明日から両親と一緒に里帰りするから、たぶん夏休み明けまでここには来られなくなる」

うつむき話す里絵を見て、二人は思わず笑い出した。すると、そんな二人を見て、里絵は戸惑いを浮かべた。

「深刻な顔しているから何かあったんじゃないかって心配していた

ら、そんなこと?」

「そんなことってことないでしょ。咲が大変なときなのに」

咲が笑いながら言うと、里絵は心配そうな表情を浮かべ顔を赤らめた。

「ごめん、ごめん」

咲は笑いながらも里絵をなだめた。そして、里絵が落ち着いたのを確認すると、

「わたしは大丈夫だよ。里絵のおかげで随分よくなったから。だから、里絵は自分の時間を大切にしろ」

咲は穏やかな表情で里絵に優しく微笑んだ。

「咲、ごめんね」

張り詰めていた糸が切れたのか、里絵は思わず泣き出してしまった。

「ごめんね。私のせいでこんなに思い詰めちゃって」

咲は里絵を抱きしめると、もらい泣きして一緒に涙を流した。

気持ちが落ち着くと、里帰りの準備をするために里絵は早めに帰ることにした。

「ごめんね」

「別にいいって。気をつけて行ってらっしゃい」

里絵は最後にもう一度咲に謝ると、戒にも頭を下げた。

「帰ってきたらまた遊びにおいで」

戒はいつものように優しく微笑みながら小さく手を振った。

「じゃあね」

「うん。じゃあね」

咲が笑顔で見送ると、里絵は二人に軽く手を振り、静かにマンションを後にした。

通りを少し歩くと里絵は振り返り、浮かない表情で夕陽に染まったマンションを眺めた。今回の里帰りは、里絵が咲との関係を再確認するために一旦距離を置きたくて両親に頼んだものであったが、いざ離れることになるのと無性に寂しくなったのである。なぜだろうか、もう二度と会えない予感さえしていた。

「ごめんね、咲」

里絵は溢れ出る涙を拭いながら家へと帰っていった。

翌日より咲は気晴らしの散歩や近所への買い物程度は一人でするようになった。

「無理するなよ」

戒は時折足を震わせながら外に出てゆく咲を心配そうに見つめていた。

「大丈夫だよ。里絵が心配しなくて済むようにしないと」

咲はそう言うといつもものように微笑んだ。

（俺が心配なんだよな）

戒はそう思いつつも咲の頑張る姿を見て、何も言えずにいた。ただ、仕事が休みのときはこっそり後をつけて行くことがしばしばあった。

咲が一人で出歩くようになり数日が過ぎた。

「ちよつと、公園まで行ってくるね」

咲は玄関で靴を履きながら、笑顔を作ってみせた。

「いつてらっしやい」

こここのところ毎日のように咲が軽い足取りで家を出て行く姿を見て、戒は安堵を浮かべていた。しかし、殺される可能性のある中、一人で出歩くことは実際には神経をすり減らすだけの作業であり、咲の疲労は頂点に達していた。

その日の夜、咲は夕飯を済ますといつもものように風呂に入った。

風呂上り、咲は脱衣所に映る自分の姿を見て、今にも泣き出しそうな表情で胸の刺青を指でなぞった。すると、鏡に付いた水滴が、まるで鏡の中の自分が涙を流したかのように頬を伝った。

「哀さん、泣いているの？」

咲は夢で見た自分と瓜二つの哀の姿を思い浮かべると、優しく微笑みながら尋ねるた。すると、相手も咲に優しく微笑みかけた。

「泣いているのは私か」

その笑顔を見て不意に涙を流した咲は、声を殺して一人涙を流した。

「咲、どうかした？」

戒は風呂場からなかなか出てこない咲を心配して尋ねた。

「うっん、どうもしてないよ。ごめんね。もう出るから」

咲は元気な声で答えたが、明らかに声が震えていた。その声を聞いた戒はドアをこじ開けようと考えたが、咲のここ最近の頑張りを思い出し、

「わかった。何かあったら言いなさい」

深く追求せずにリビングに戻っていった。

風呂から上がった咲は泣き腫らした顔を戒に見られないように部屋に戻ると、ベッドに潜り込んだ。

「咲、もう寝たの？」

戒は尋ねても咲からの返事がないため、ドアを少し開けた。しかし、部屋は真っ暗で咲はベッドで眠っているようなので、何も聞かずに部屋を後にした。

（お兄ちゃん、心配かけてごめんね。ごめんね）

咲は心の中で何度も繰り返すと、いつの間にか眠りについていた。

暗闇の中で目を覚ますと、咲は当たり前のように哀を探した。しかし、いつもとどこか雰囲気違ったため、咲は警戒して辺りを見渡した。すると、

「咲さん、早く目を覚まして」

哀の声が静かな空間に木霊した。

咲は声が聞こえる方へと駆け寄ると、そこには自分によく似た姿の人物ともう一つ人影があった。

「哀さん？」

「来てはだめ」

咲が声を上げて近づこうとすると、哀は前方に鋭い視線を送りつつ、咲を必死に制止した。

咲は恐る恐る哀の視線の先にあるもう一つの人影を注意深く見た。すると、その人影はゆっくりとその姿を現した。

『お兄ちゃん？』

咲は戒の姿を見るなり驚き、目を丸くした。

片手に小刀を握り締めたまま、戒はいつものように咲に微笑みかけると、何も言わずにその刃を哀の胸に突き刺した。

『な、何しているの？』

『大丈夫。これは夢だから。悪魔が見せている悪夢だから』
脅える咲に哀は優しく微笑みかけると、その場に倒れこんだ。

戒は哀の身体から小刀を抜くと、それを持って冷や汗をかき身体を震わせている咲に歩み寄った。

『いや、来ないで』

咲は力の入らない足で必死に後ずさりをした。すると、咲は戒の後ろにとつともなく大きな影を見た。

『ほう、私の姿が見えるのか』

戒の口を通して暗く、鈍い声が響き渡った。

『何なのあなた？』

咲はいよいよ怖ろしくなり、足に力を入れるとその場から立ち去ろうとした。しかし、その影から伸びる手に身体を掴まれると、咲は身動きがとれなくなった。

『恐怖から救ってやるう』

戒は咲に歩み寄ると、小刀を左胸に構えた。

『いや、やめて』

咲は必死に首を横に振るが、戒はうつろな表情を浮かべたままであった。そして、刃は静かに咲の左胸へ入っていった。

『お兄ちゃん』

最後の力を振り絞って咲が声を上げると、戒は黙ったまま真っ直ぐ涙を流した。

『お兄ちゃん』

戒が部屋で仕事をしていると、咲の部屋から叫び声が聞こえてきた。

戒は慌てて部屋を飛び出すと咲の部屋へと向かった。そして、ドアを勢いよく開けると、咲のもとへと駆け寄った。

「どうした、咲？」

戒の声で目を覚ました咲は、目の前の戒の姿に驚き、思わず戒を突き飛ばした。

「来ないで」

戒は脅える咲の姿に一瞬戸惑いを見せたが、すぐさま穏やかで優しい笑顔を浮かべた。

「どうした？」

咲は再度聞く戒の優しい声とその表情が夢の中のものとは異なるとわかると、戒の胸に泣きついた。

「怖い夢を見たの。お兄ちゃんが不気味な影に操られて、私を殺そうとするの」

子供のように声を上げて泣く咲を強く抱きしめると、

「それで俺を突き飛ばしたのか」

戒は口元に優しい笑みを浮かべた。

「ごめんなさい。でも、本当に怖かったんだ」

咲は戒の身体をきつく締付けた。すると、戒は優しく咲を抱きしめ、そつと頭を撫でた。

「もう、大丈夫だよ。それは夢だから」

咲はその言葉を聞くと、哀のことを思い出した。

（哀さん、大丈夫だよ。夢の中の出来事だからまた逢えるよね。それにしても……）

咲はあれこれ考えているうちにいつの間にか眠ってしまった。

「お前の仕業か」

戒は咲をベッドに戻すと戒は小声で、歯を食いしばりながら誰かしらに尋ねた。しかし、咲以外に誰もいないその部屋では当然返事はなかった。

「もう終わりにしよう」

戒は険しい表情で加えて言い放つと、悲しい瞳で咲が寝付くのを傍

らで静かに見守った。

朝になり、咲が目を覚ますと横には戒の寝顔があった。

（お兄ちゃん、ずつといてくれたんだ）

咲は戒の手を握り締めると照れくさそうに鼻を掻いた。そして、戒が起きないようにベッドを抜け出すと、戒に布団を掛け、朝食の準備を始めた。

「おはよう、咲」

戒はベッドに咲がいないことに気づくと、眠い眼を擦りながらリビングに向かった。

「おはよう。ご飯できているよ」

咲はすつきりとした表情で戒を迎えた。

二人が朝食を終え、二人がお茶を飲みくつろいでいると、二人は眼を見合わせた。すると、昨夜のことが思い出され、二人の間を沈黙が包んだ。

「あ、あのね」

その中で咲が重い口を開くと、戒は注意を傾けた。

「もう、無理はやめるね。夢遊病の時みたいにゆっくりと時間をかけて気持ちを变えていこうと思うの」

咲は昨夜のことを思い出すと、うつむき少し恥ずかしそうな表情を浮かべた。

「そうだね。それが一番いいよ」

戒はそんな表情の咲を見て優しく微笑みかけると、湯飲みを片付け始めた。戒の笑顔を見て、咲は緊張の糸が解けたのを感じた。

それから数日が経ち、夏休みも残すところ十日ほどとなった頃、咲は家の中はあるが確かに元気を取り戻していった。

咲の寝坊癖は相変わらずで昼すぎに起きてくると、珍しく自宅の電話が鳴り響いた。咲は寝ぼけ眼で受話器を取ると、少し不機嫌気味に話し始めた。

「はい、もしもし」

「あ、もしもし。その声は咲ちゃんかな」

咲は渋く落ち着いた話し方をするその声を聞くと、一瞬で目が覚めた。

「賢志おじさん。お久しぶりです」

戒の父親であり、咲の義父でもある賢志は鳴海の葬儀後、時折咲を心配して電話を掛けてくれていたが、ここ最近は何の連絡もなかったため、咲は驚きと喜びを顕にした。

「戒の奴はちゃんと優しくしているか？」

「はい。本当に優しくしてもらって、すごく幸せです」

新婚の妻のような受け答えに賢志は大きく笑うと、咲は耳まで真っ赤にした。そして、しばらく他愛のないおしゃべりを楽しんだ。

（咲、誰と話しているんだろう）

戒は年頃の娘がいる父親のように心配そうな表情でリビングから顔を覗かせた。咲は戒と目が合うとその表情を見て笑った。

「お兄ちゃんが情けない顔して覗いているので、そろそろ変わりますね」

咲はクスクス笑いながら話をする、

「お兄ちゃん、賢志おじさんから電話だよ」

受話器を戒に渡した。

「何だよ。用事があるなら携帯に掛けてくれればいいだろう」

戒は咲の目を気にしながら邪険に話し始めた。

「何を言っている。自宅に電話しないと咲ちゃんの声が聞けないだろ。まったく、たまには顔を見せなさい」

「悪かったよ。夏休み中に時間を作って顔を見せに帰るから」

賢志が強い口調で言うのに対して、戒は申し訳なさそうに答えた。

咲は終始声を殺してクスクス笑いながら何度も首を縦に振った。

「咲もうなずいているから」

「そうか。待っているからな」

二人は坦々と話を進めた。咲は戒の表情が次第に真剣になってゆくのを察して、邪魔をしないようにリビングへと向かった。

「……すまない、親父」

「構うものか。俺にだって責任がある」

戒がしばらく押し黙っていると、咲は心配してリビングから顔を覗かせた。

「じゃあ、続きは今度顔見せに行つたときにしよう」

戒は咲の視線に気がつくのと、急に明るい声で話し始め、同時に咲のほうを見て微笑んだ。咲も戒に微笑むと、リビングに戻り用意されていた昼食を食べ始めた。

電話が終わり、戒はリビングに戻ってくると咲の向かいに座つた。親父が顔を見せに來いとうるさいけれど、どうする？」

「うん、行こう。私は大丈夫だから」

戒は咲の身体を気にしながら尋ねると、咲は食事の手を止めて戒の眼を真っ直ぐ見て答えた。

「明日、明後日で仕事の目途をつけるから、三日後に行こう」

咲の返事を聞くなり、戒は途端に表情を緩ませ咲に提案した。

「うん、わかった。ただ、その日は朝に学校へ行かないといけなから、その後でもいいかな？」

「ああ。それじゃあ、荷物を載せてタクシーで学校に迎えに行くよ。」

二人は帰郷の予定を立てると、咲は少し遅い昼食を済ませた。

今回の帰郷は夏休み未までの予定であるため、賢志の家でゆっくり過ごすためにも、咲は出発までの三日間宿題や課題に励んだ。そして、あつという間に三日が過ぎた。

「咲、もう出ないと電車に乗り遅れるよ」

「うん」

咲は学校の玄関から飛び出てくると、校舎に向かって深々と一礼をした。

「咲」

「はい」

二人はタクシーに乗り込むと、急いで駅へと向かった。

「よかったね、間に合いそうで」

タクシーを降りると、咲が笑顔で戒のほうを振り向いた。

「ああ」

気のない返事をし、戒はタクシーから荷物を降ろすと、咲の荷物を差し出した。しかし、咲はニコツと笑うと戒に荷物を持たせたままホームへと向かった。

「こら、咲。自分の荷物くらい持ちなさい」

声を張り上げる戒を尻目に咲は前を歩いていった。

「おじさんに会うの久しぶりだね。おじさんの家に行くの初めてだから楽しみ」

駅のホームで少し不機嫌気味な戒を見て、咲は必死に話題を作った。

「そうか、咲は親父の家に行ったことなかったか」

戒は自然と笑みを浮かべて咲に接したが、その瞳はどこか悲しみを秘めているように感じられた。

二人が新幹線に乗り込むと、長野までの道中、咲は窓からの景色を堪能していた。

「うわー、綺麗な景色だね。お兄ちゃん」

「ああ」

戒は何か考え事をしているのか、咲の呼びかけにも上の空の返事をした。

「お兄ちゃん、気分でも悪いの？」

「ううん。大丈夫だよ。何でもない」

咲が心配して戒の顔を覗きこむと、戒は慌てた表情で答えた。

「親父の家も山奥にあるから景色が綺麗だよ」

すぐさま戒は咲に笑顔で接した。咲にはその笑顔は戒が無理に作って見せているように見えたが、追求せずに微笑みかけた。

「そういえば、おじさんって画家だった？」

「絵を描くだけではなく、陶芸、彫刻とかもやっているよ。いわゆる芸術家ってやつだね。骨董好きの政財界の大物に仕事を依頼され

ることもあるんだって」

まるで自分のことのように得意になって父親のことを話す戒の表情を見て、咲は戒がどれほど父親を誇りにしているのか、容易に読み取ることが出来た。

「へー、すごいねえ。おじさんの家に着いたら色々と見せてもらおう」

「ああ。そうだね」

その後、二人は会話を弾ませながら賢志の住む長野県へと向かった。電車に揺られて一時間半ほどすると、二人は長野に到着した。すると、そこには車で迎えに来ていた賢志の姿があった。

「おーい、咲ちゃん」

年甲斐もなく大きく手を振る賢志を見て、戒は恥ずかしそうに頭を抱えた。

「おじさん、こんにちは」

そんな戒の隣で咲は大きく手を振って応えた。

「やめなさい。恥ずかしい」

戒は咲の手をとると、足早に賢志の車へと向かった。

「やめるよな。いい歳して恥ずかしい」

「何を言つとる。感情を表に出せないで芸術家が務まるか。そもそもお前は親に会って挨拶もできんのか」

着いて早々もめ始めた二人を見て、咲はクスクス笑った。

「はい、その大人たち、公衆の面前でケンカしない」

咲は手を叩くと、二人は恥ずかしそうな顔を浮かべた。

「いや、申し訳ない。さあ、咲ちゃん。車へどうぞ」

賢志は助手席のドアを開けると、咲を車に乗せた。

「ほれ、戒。荷物をトランクに載せなさい」

賢志に指示されると、戒はあからさまに不満そうな表情を浮かべたが、咲が優しく微笑んでいるのを見て渋々荷物を積み込んだ。

「いやー、咲ちゃん。綺麗になったね」

「そんな。変わってないですよ」

「高校二年生だっけ？ 学校は楽しいかい」

二人は和やかなムードで話をしていった。しかし、戒は二人の会話に興味を示さず、ただ黙って景色を眺めていた。

（お兄ちゃん、機嫌悪いのかな？）

咲が心配してミラー越しに戒の様子を気にしていると、

「大丈夫だよ。あいつはこの辺りの風景を懐かしがっているだけだから」

賢志は咲にそっと耳打ちした。咲は賢志の穏やかなで優しいその表情を見ると鳴海の顔を思い出した。

「はい」

咲は瞳に涙を溜めながら満面の笑みで答えた。

「どうした、咲。親父、咲に何を言ったんだ」

ふと咲のほうを見た戒は、涙を浮かべる咲の姿を目にして、怒鳴り口調で賢志を問いただした。

「お兄ちゃん、違うの。おじさんと話していたらお父さんのことを思い出しちゃって」

咲は慌てて戒に説明すると、ハンカチで涙を拭った。

「まったく。過保護なお兄ちゃんて困ったものだね、咲ちゃん」

賢志がミラーで戒の顔を見ながら呆れ顔で言うと、

「あんたは放任すぎるんだよ」

戒はフンツと横を向いて、また風景を眺め始めた。その様子を見ていた咲は、

「二人とも子供みたい」

二人の顔を見ながらクスクス笑った。

車を走らせること三十分、三人はようやく賢志の家へと到着した。「うわー、素敵な家ですね」

山の中に一軒、コテージのように木を組んで造られている賢志の家は、まるで別荘のようであった。

「この家は親父が自分で設計したらしい。奥に離れが二つあって、そこで絵を描いたりしているんだよ」

戒が車のトランクから荷物を取り出しながら説明した。

「へえー。後で作品を見せてもらえませんか？」

「よし。じゃあ、一息ついたら案内してあげるよ」

咲が賢志にお願いすると賢志は快く引き受け、咲に優しく微笑みかけた。そして、咲の荷物を持つと、二人を家の中に招き入れた。

進展

里絵が帰郷して咲が一人立ち直ろうと努力している頃、北島は第四の事件を追って富良野に来ていた。

「北島刑事ですね？ 私、北海道警察署の古井と申します」

車を降りて事件現場にゆっくりと歩いてくる北島の姿を見るなり、サングラスを掛け、あごに薄っすらと髭を生やした三十代後半くらいの男が声をかけた。

「警視庁の北島です。早速ですが事件の詳細を説明していただけますか？」

北島が警察手帳を見せると、古井もまた手帳を取り出し、事件の詳細を説明し始めた。

「事件発生は八月四日十四時五分。被害者は政治家の里山祐貴、十六歳。死因は左胸部を刺されたことによる出血死です」

北島は話を聞きながら手帳にメモし始めた。

（その時間、彼らは沖繩にいたはずだ。これで春日戒には一、四の事件にアリバイが、川本咲には二、四の事件にアリバイがあることになる。彼らは事件に関係ないのか？ いや、共犯者がいる可能性もある）

北島は自問自答して考え込んだ。

「北島刑事？ いかげされました？」

難しい顔つきの北島の顔を古井は心配そうに覗き込んだ。

「いや、別に。それより、連絡を受けたときに目撃者がいると聞きましたか？」

北島が尋ねると、古井は表情を曇らせた。

「どうかしました？」

「いや、ね。その目撃者というのが、この辺りで有名な頭のおかしい婆さんでして。証言も訳がわからないことを言っているだけなんですよ」

古井は苦笑を浮かべた。

「どんな証言ですか？」

北島は真面目な顔をして古井に尋ねた。

「何でも、風に乗ってやって来た黒い影が里山氏の左胸を小刀で貫いたそうです。そして、黒い影は消えていった」

話を聞いた北島は腕を組んだ。

「何やら神がかった証言ですが、黒い影というのはおそらく黒コートの人間でしょう。事件現場で目撃証言が出ています。それに凶器は小刀と明確に証言されている」

北島は話をしながら煙草を取り出し、火をつけると、

「より詳しい証言を伺いたい。そのおばあさんのところに案内していただけませんか？」

続けて古井にお願いした。

「上司からあなたの指示に従うよう言われています」

古井は一瞬渋い顔をしたが、そう言うと北島を自分の車まで案内した。そして、古井は北島を自分の車に乗せ、目撃者の住む家に向けて出発した。

北島が案内された家は、草原に一軒佇むまるでお化け屋敷のような廃れた家であった。

「ここになります」

古井はサングラスを中指で上げると、渋い顔でその家を指差した。

「すごい家だな」

北島は苦笑を浮かべながら車を降りると、二人は扉が外れかけている玄関に向かった。

「先月、近所の人がこの辺りで犬の散歩をしていたら、ばあさんに犬を盗まれて食べられそうになったという事件がありました。そんなこともあって、近づくとはあさんに喰われるという噂も立って、今となつては新聞の勧誘も近づきませんよ」

古井も車を降りると、ため息をつきながら北島の少し後方を歩いていった。

「まさか、本当に食べられることはないでしょう」

北島は古井に笑いかけると扉を優しく叩いた。

「こんにちは。警視庁の北島です」

北島は声を上げた。しかし、中からは物音一つしなかった。

「すみません。どなたかいらっしゃいませんか？」

北島が再度声を上げると、

「聞こえているよ。しつこいね」

腰に手を添えた老婆がゆっくりと歩いてきた。

「それで、今度はどんなでっち上げで文句を言いに来たんだい？」

老婆は落ち着いた口調で北島に尋ねた。

「このご婦人が目撃者ですか？」

老婆の姿を見てどこか気品を感じた北島は、古井に小声で尋ねた。

「ご婦人だつて？ カツカツカ。……あなたは口の利き方を知っているようだね。まあ、上がりなさい」

気を良くした老婆はニヤリと笑みを浮かべて二人を家の中へと招き入れた。

居間に案内された北島たちは、テーブルの前で腰を下ろした。家の中は外観とはうって変わって、物はきちんと整理されていた。また、家具も腐朽した様子が見られなかったため、北島は驚いた様子で辺りを見回していた。

「納得いかないかい？ 中がきちんとなつていて」

お茶を運んできた老婆は、北島の心を見透かすようにジッと顔を覗きこみながら尋ねた。

「いえ、そういう訳ではありませんよ。驚きはしましたが」

北島は老婆の眼を見て答えた。

「玄関が壊れているのは家の老朽化が原因ではないのさ。近所の心無い人間の仕業。年金暮らしの年寄りでは玄関が壊されても、窓ガラスが割れても直すことが出来ないからね」

老婆はお茶を配ると、ゆっくりと腰を下ろした。

「仕事や家庭、学校、日常生活、さまざまな場面で抑圧が起こる現

代社会では、バランスをとるためにその掃溜めを必要とする。その役回りが私にただけさ」

老婆は暗い面持ちを浮かべたまま、ゆつくりとお茶をすすった。

「そんな。警察には言わなかったのですか？」

「もちろん言ったとも。でも、世間で私はいかれた婆さんだからね。昔の話を持ち出して、まともに取り合う警官なんていなかった。私を保護したら、私を掃溜めとしている連中が黙っていないしね」

老婆はその表情を変えることなく、坦々と話した。

「それで、今日は何の用だい？ 今更、保護しに来たわけでもあるまい。犬を喰おうとしたという噂を信じて逮捕でもしに来たかい？ 老婆は二人をからかうような口調で話しかけた。

「いえ、今日はあなたが目撃されたという殺人事件について話を伺いに来ました。調書によりますと、黒い影が被害者を刺して消えたとなつていますが？」

北島は真剣な面持ちになると、話を始めた。すると、老婆は深くため息をついた。

「調書って誰のだい？ 私は一度も警察に話を聞かれていないよ。」

北島は驚きを隠しきれなかった。

「どういうことですか？」

北島は古井の顔を睨み付けるかのように鋭い視線を送った。

「え、えー。調書の証言者は岡本優さんとなっております」

古井は慌てて調書を開くと、指で調書をなぞりながら北島に答えた。

「それは私が警察と救急車を呼ぶよう頼んだ人間だね」

二人の言葉を聞いて、北島は古井に向けて呆れ顔を浮かべた。

「申し訳ありません。今回のことにつきましては、きちんと調査を致します」

北島は深々と頭を下げた。その様子をジッと見ると、老婆はお茶をすすり、一息ついてゆつくりと話し始めた。

「私が見たのは黒いコートの人間だよ。犯人は左胸を刺して殺した後、服をめくり上げて刺した跡を眺めていたね」

(刺した跡？ 何のために)

北島は眉間にしわを寄せて首を傾げた。

「それで、その人物の顔は見ましたか？」

「いや、後姿しか見なかったね」

北島は手帳を取り出し、メモし始めた。

「何かわかることはありませんか？ 犯人の性別やおおよその年齢などは？」

「中年の男だった気がするねえ。何せ後姿だけだから、年齢まではちよつと……」

(……中年男性？)

北島は複雑な顔をして、ペンで頭を掻いた。

「凶器は犯人が持ち去ったんですか？」

「ああ、そうだよ」

北島は一通り質問し、書き終わると一息ついた。

そして、しばらく沈黙が続いた。

「被害者は呪われた人間だね。犯人も同じじゃないかね？」

北島は老婆のその発言に敏感な反応をした。

「どうのことですか？」

「被害者の胸に焼き付けた刻印があつたらう。五十年くらい前に似たような事件があつてね。黒魔術で呪いをかけて殺したと犯人が証言したものだよ。悪魔に魅せられた不幸な人間さ」

北島は難しい顔をして考え込んだ。黒魔術という非現実的な言葉に戸惑いを隠しきれないと同時に五十年前の事件について調べる必要があるかどうか決めかねていたからである。

(犯人像は後で似顔絵を作成するとしても現段階で証拠もなければ、犯人の目処もなし。当たってみるしかないか)

北島は渋い顔をした。

「……ここらに大きな図書館、資料館はありますか？」

北島が古井に尋ねると、

「調べるんですか？」

古井は疑念の眼差しで北島の顔を見た。

「ええ。私は五十年前の事件を、黒魔術に関しては捜査本部の捜査員に調べさせます」

北島はそう言うと、携帯電話を取り出し廊下へと出た。

「もしもし、小柳か？ 北島だ」

「どうも、小柳です」

北島が話し始めると、老婆はゆっくりと立ち上がり、ダンスから箱を一つ取り出した。

「刺青に関してだが、奇妙な話になるが黒魔術に関わっている可能性がある。念のため手の空いている捜査員と協力して調べてみてくれないか？」

「黒魔術？ ……わかりました。調べてみます」

小柳は北島の話に一瞬困惑を浮かべたが、命令ゆえにすぐさま了承した。

北島は小柳に北海道での捜査状況を話し終わると、居間へと戻った。すると、テーブルの上に箱が一つ置かれていた。

「それは？」

北島が老婆に尋ねると、

「さつき話した黒魔術の事件の記事と資料さ」

老婆は相変わらず坦々と話したが、その瞳には悲しみを満ちているように感じられた。

「お茶が冷めちまつたね」

老婆はゆっくりと腰を上げると、お茶を入れ直しに台所に向かった。

北島は老婆の背中に小さく頭を下げると、箱を開けた。その中には新聞紙から黒魔術に関連する事柄の切抜きが整理されたファイルがあった。北島はいくつかある新聞をテーブルに広げて斜め読みした。

『事件発生は一九五一年の七月、当時二十歳の大学生であった坂井優生が幼馴染で同じく二十歳の朝本浩二によって殺害されることに

よる。朝本は坂井氏を殺害後、凶器に使用したナイフで背中に奇妙な文字を刻んだ。警察の調べによると、文字は黒魔術で人を呪い殺すために用いられるものであり、朝本は呪いによって殺したと証言。無実を訴えた。警察は朝本を殺人の容疑で逮捕した。』

『黒魔術殺人事件の容疑者朝本、動機は被害者である坂井氏に恋人を奪われたからと証言。また、黒魔術は同級生に教えてもらったと証言。』

『黒魔術殺人事件で裁判所は朝本浩二に懲役二十三年を言い渡した。』一九五八年、黒魔術殺人事件の犯人朝本浩二が刑務所で自殺しているのを発見された。本人が最期に母親へ託した手紙が公開された。内容は、『呪いは失敗していたようだ。悪魔を怒らせてしまった。悪魔に殺される』というもの。』

(……黒魔術か)

北島は疑念が拭いきれずにいた。

北島が一通り記事を読み終える頃、老婆がお茶を入れなおして戻ってきた。

「ありがとうございます。それにしてもよくこんな古い記事をとってましたね」

北島が言うのを聞くと、老婆は黙ったままゆっくりと腰を下ろし、お茶を配った。

「私の名前も調べずにやって来たのかい？」

老婆はうつろな表情で北島を見た。

「失礼しました」

確かに名前を確認せずに訪ねてきた北島は、素直に老婆に頭を下げた。すると、老婆は悲しそうな表情で湯飲みを覗き込んだ。

「朝本由利、黒魔術殺人事件の犯人朝本浩二の母親さ。……これがいかれた婆さんの由来、呪われた子供を育ててしまった」

北島は老婆の瞳に涙が溜まるのを見て言葉を失った。

しばらく沈黙が続くと、古井が重い雰囲気の中で口を開いた。

「その事件の調書なら署のほうで保管していると思います」

「……そうか。では、そろそろ失礼しましょう」

北島たちが腰を上げると、老婆は見送るためにゆっくりと腰を上げた。

「それでは、ありがとうございました」

北島たちが頭を下げると、老婆は口をもごもごさせた。

「何です？」

北島が穏やかな口調で尋ねると、

「あの子もね。可哀想な子だったんだよ。呪いをかけなければいけないくらい追い込まれていたんだ。今回の事件が黒魔術に関わりがあるのかどうかはわからないけれど、呪いかかけられた人間も呪いをかけた人間も可哀想の人間なのさ。それに関わった人間もね」
老婆は溢れる涙を堪えることができず、うつむき静かに涙を流した。

「わかつています。一刻も早く解決できるよう努力します」

北島は老婆と約束を交わすと、深々と頭を下げた。

「今度玄関等の被害届けを出しに来てください」

古井は穏やかな表情で優しく話しかけると、老婆は静かに微笑み、うなずいた。そして、二人は車に乗り込むと、一度事件現場に戻り、各々の車で北海道警察署へと向かった。

北島たちは北海道警察署に着くと、早速資料を調べ始めた。

「『昭和二十六年 黒魔術殺人事件』これだ」

北島は事件の調書を見つけると、黒魔術に関する箇所をいくつかその場で読み始めた。

『犯行のきつかけとなった黒魔術は相手に悪霊を憑け、呪い殺すというもの。その術式は以下のようなものである……』

『朝本が黒魔術を知ったのは大学一年のとき。同じサークルに属する中村流との出会いを契機とする』

北島は本に描かれている術式と今回富良野で殺害された里山の写真

と照らし合わせた。

（確かに似ている。……黒魔術を教えたとされる中村流、一応調べた。）

その日から数日間、北島は北海道警察署に泊り込み、半信半疑ながらも黒魔術と当時の事件について徹底的に調べることにした。

「北島さん、中村流の身元が割れました」

古井は見つけた調書を開きながらゆっくりと北島に歩み寄った。

「それで？」

北島はコーヒーを二つ入れながら古井に尋ねた。

「中村流、享年六十六歳。死因は心臓発作。妻は流氏が亡くなる三年前に病気で死去。子供が一人います、名前は中村奈々。彼女は長野県で娘が自殺した後、後を追っています」

「自殺した娘とその父親については？」

古井の報告を聞くと、北島は続けて尋ねた。

「もちろん調べてあります。父親の名前は中村真也、驚いたことに今回の事件の二番目の被害者です。娘の名前は哀といって、高校生 のときに同級生の家で自殺したそうです」

北島はあごに手を当てて、何やら考え事を始めた。

（二番目の被害者？ それに哀という名。確か川本咲が事件当時に発した名前もアイだったな）

北島は諦めかけていた、咲と今回の事件との関わりを再認識した。

「中村哀が自殺した家である同級生のことは？」

「それが、二人が恋人関係であったこと以外は何も。恋人を失ったショックで取り調べができないうちに、中村哀は学校でのいじめを苦にしての自殺として処理されて、同級生についてはうやむやになっ てしまったようです」

古井の話を一通り聞き終えると、北島は次にすべき捜査をあれこれ考えていた。しかし、ここで考えていても埒が明かないと判断した。

「中村哀の通っていた高校の住所を教えてください。直接聞いてき

ます」

北島の言葉を聞くと、富良野に来たことといい、朝本家に自らで向いたことといい、古井はその行動力に驚きを浮かべた。

「え、ええ。ここになります」

古井は慌てた様子でメモ用紙に住所の書くと北島に手渡した。

「長野県か。遠いな」

北島は本部にいる小柳に長野に行くことを説明しようと携帯電話を取り出した。すると、ちょうど小柳から電話が掛かってきた。

「小柳か？ ちょうど電話を掛けようと思っていたところだ」

「北島さん、八月の沖縄旅行の最終日に川本咲が倒れたという報告をしたと思いますが、その際に彼女の胸元に刺青が浮かび上がったことが同行していた彼女の親友の証言で明らかになりました。確かめに行こうとしたら昨日荷物を持ってどこかへ出掛けたりしないで。どうしたらいいですか？」

北島が電話に出ると、小柳は慌てた様子で話し始めた。

「まず落ち着け。川本咲の交友関係だけでなく春日戒の職場や交友関係に聞き込み、二人の居場所がわかり次第川本咲を保護しろ。私は調べたいことがあって長野に向かう」

北島は小柳を落ち着かせるために少し強い口調で言った。

「わかりました」

小柳のしつかりとした返事を聞くと、北島は電話を切り、

「私の車を表に回しておいてもらえますか？」

古井に車の鍵を渡すと、資料を持って資料室を出ていった。そして、署長に資料持ち出しの許可を得た。

「北島刑事、鍵です」

「ああ。ありがとうございます」

北島は戻ってきた古井から鍵を受け取ると、

「長い間、ありがとうございます」

小さく一礼した。そして、すぐさま車に乗り込むと、北海道警察署を後にした。

記憶

家の中に案内されると、咲は物珍しげな顔で部屋の一つ一つを覗き込んだ。しかし、どの部屋も初めて見るといった新鮮さはなく、咲の胸には懐かしさがこみ上げてきた。

「咲ちゃんの寝る部屋は二階だよ。戒の部屋の隣」

「はい」

咲は自分の荷物を持つと笑顔で階段を駆け上がった。

「どれがその部屋かわからないだろう」

戒はそう言うと咲の後に続いて階段を上っていった。

戒が階段を上り終わると、咲が戒の部屋に入ってゆくのが見えた。

「ほら、咲。部屋はその隣だよ」

戒が自分の部屋に入ると、咲は茫然と立ち尽くしていた。

「どうした、咲？」

「不思議だね。初めて入った部屋なのに、懐かしさで涙が溢れてくる」

咲はその瞳に涙を溜めたまま微笑みを浮かべた。そして、照れくさそうにうつむきながら、隣の部屋へと駆けていった。その顔を見た戒は悲しげな表情を浮かべた。

夕方になり、賢志は夕飯の支度を済ますと部屋で休んでいる二人を呼んだ。

「待っていました。ご飯は何ですか？」

咲は部屋を出ると、階段を降りながら賢志に尋ねた。

「今日のために、昨日山で採って保存しておいた山菜とさつき川で釣ってきた魚だよ」

「うわー、すごい。お兄ちゃん、早く降りてきなよ」

咲はテーブルに並んだ料理を見て目を輝かせ、部屋からなかなか出てこない戒を呼んだ。

「ああ、すぐ行くよ」

戒は眺めていた写真を本の間挟むと、うつろな顔をして下に降りていった。

賢志の家にはテレビがなく、三人は静かに雑談をしつつ、夕飯を済ませた。

「片づけが済んだら離れを案内してあげるよ」

「本当ですか。じゃあ、手伝います」

咲はそう言うと、空いた食器をまとめ始めた。

「ごちそうさま。先に部屋で休ませてもらうよ。何かあったら呼んでくれ」

戒はそんな二人を横目にゆっくりと席を立つと自分の部屋へと向かった。

「何か元気ないですね」

咲は戒の食器を片付けながら、心配そうな表情を浮かべた。

「久しぶりの帰郷を懐かしんでいるだけさ」

賢志は戒のことを気に止めていなかったが、咲は戒の表情が懐かしんでいるのではなく、哀しんでいるように見えた。そして、戒だけではなく、賢志もまた同じ表情を浮かべているようだった。

片づけを済ませると、咲は賢志の案内で離れを回った。

一つ目の離れは母屋から少し歩いたところにあり、窓は一つもなく、換気のために天井付近にいくつか穴が開いているだけであった。部屋の中には人間や動物などのさまざまな彫刻や皿や湯飲みなどの陶器が棚の上に並べられていた。

「ここは彫刻をしたり陶器を作ったりするところだよ。釜はこの離れの裏にある」

賢志は道具や作品の一つ一つを咲に丁寧に説明した。咲はそれをただ黙って聞いていたが、賢志がどれ程の思い入れを持って作品を作っているのかをひしひしと感じ、時折満面の笑みで応えた。

「あれは何ですか？」

咲は純白のシートに包まり鎖で錠までしてある、他の作品と比べてひと際大きく重々しい作品を指差して賢志に尋ねた。

「ああ、あれは戒が高校のときに作ったものだよ。戒の最も大切な人の等身さ」

賢志はその作品を哀しげに見つめながら答えた。

「その人は今どうしているんですか？」

という咲の当然の疑問に賢志はいっそう表情を曇らせた。

「……作品が完成する頃に亡くなったよ。自殺した」

賢志は彫刻にゆっくりと歩み寄ると、うつむきながら続けた。

「最初は自分のことを忘れないよう、彼女は作品が完成するまで待ったのだろうと思っていたが、彼女は戒が寂しくならないように自分の身代わりを作らせたのかもしれない。誰よりも人を思いやれる優しい娘だったから」

話を聞いた咲は腑に落ちない表情であった。

（人を誰よりも思いやれるのに、お兄ちゃんを残して？）

あからさまに不満を浮かべる咲の顔を見るなり、賢志は優しく微笑んだ。

「想いの表し方もさまざまなのさ。人によっても異なるし、状況や環境によっても変わってくる。……さあ、次へ行こう」

賢志は咲の肩を軽く叩くと、うつむき加減の咲を連れてもう一つの離れへと向かった。

次に案内された離れには、部屋中に大きな窓があった。その窓からは日中になると日が差し込み、穏やかな陽気が部屋を包んだ。

「ここが絵を描く場所だよ」

その部屋は主に油絵を描くところでシンナーのような匂いが充満していた。また、部屋の中には数々の作品があり、額に入って飾られているものもあれば、無造作に置いてあるものもあった。

「そうだ、明日もし咲ちゃんの都合がよかったらスケッチさせてもらおうかな」

咲は賢志の突然の申し出に、一瞬目を丸くした。

「本当ですか？ お願いします」

しかし、咲はすぐさま笑顔で答えた。すると、賢志も優しく微笑ん

だ。そして、咲は離れにある絵を一通り鑑賞すると、二人は母屋に戻った。

翌日、三人が朝食を終えると、咲と賢志は早速離れへと向かった。「油絵か？」

「本当はそうしたいところだが、あれは時間が掛かるからな。とりあえずスケッチさ」

咲は戒と賢志の会話を聞くと、

「大丈夫ですよ。冬休みも来ますから。ね、お兄ちゃん」

咲は戒にニコツと微笑みかけた。

「ああ、そうだな」

戒もまた咲に優しく微笑み返した。

「それじゃあ、お兄ちゃん、昼食作っておいてね」

「作っておいてね」

咲と賢志はそう言うのと、逃げるように母屋を飛び出した。

咲は離れに着くと、賢志の指示で大きな窓の前に置かれた椅子に腰掛けた。咲が持ってきていた白いコートを羽織ると、日光をよく反射して咲の清楚な印象を際立たせた。

「おじさん、どうかしました？」

咲の姿に見惚れ、涙を瞳に溜めている賢志を見て、咲は不思議な顔を浮かべた。

「いや、何でもないよ。咲ちゃんも大きくなったなあって思っていたら思わずジーンとしてしまっただね。駄目だね、歳をとると涙もろくて」

賢志が涙を拭くと、咲は優しく笑みを浮かべながら賢志を見つめた。

「いいね。その顔でいておくれ」

賢志はスケッチブックを取り出すと、リーゼルに載せて絵を描き始めた。

スケッチが始まり、一刻ほど過ぎる頃、

「お兄ちゃんって美術の成績よかったですか？」

咲はスケッチブックで隠れた賢志の顔を覗きこんだ。すると、賢志

は笑いながら首を横に振った。

「えー、だつてあんなに大きな彫刻を作っているじゃないですか。あの彫刻も上手ではないんですか？」

「いや、あれは芸術だよ。ミロのヴィーナスと肩を並べてもおかしくない程のね。おそらく私が一生かかっても、あれだけの作品は作ることはできないだろう」

賢志は悲しげな瞳で答えると、一旦手を止めた。

「あれには戒と彼女、二人の心が入っているんだ。あれが未だに形あるのは、今でも二人は互いに互いを愛し合っているからだろう」

賢志は続けて話した。すると、咲の心には何か温かいものがこみ上げてきた。

「さあ、顔を上げて」

賢志は声を張り上げて咲に言うと、咲は泣きそうになるのを堪えつつ、顔を上げて必死に笑顔を作った。

(……お兄ちゃん、そんな話してくれたことなかったなあ。そういえば、お兄ちゃんの昔のことって、私何も知らない)

咲は自分の知らない戒の存在を知り、少し寂しさを覚えた。

日が上がりきった頃、賢志はスケッチを終えた。

「時間があればこの絵を元に油絵を描くよ」

「本当ですか？ 楽しみにしています」

咲はスケッチブックの絵を撫でながら賢志に笑いかけた。

「さあ、戻ろうか。戒のやつが飯を作っているだろうから」

賢志は穏やかな表情で言い放つと、二人は母屋へと戻っていった。

「今度は陶芸を教えてください」

「あ、ああ。喜んで。二、三日は仕事があるから、それが終わったらね」

咲の申し出を嬉しく想った賢志は、快く受け入れた。

咲がリビングに戻ると、食卓には料理が並べられていた。

「遅かったな」

「寂しかったのかな？」

咲は上目づかいで戒を子ども扱いしてからかった。

「咲のご飯はなしでいいのかな？」

戒はすねた表情で咲の器を盆に載せて提げ始めた。

「うそ。ごめんなさい」

咲は盆に載った器を戻しながら、慌てて戒に謝った。後ろから二人の様子を見ていた賢志は、クスクス笑いながら自分の席に着くと、黙って食事をとり始めた。

「黙って食べるなよ」

戒が賢志を指差して言うと、咲も真似をして食べ始めた。

「咲も」

慌てた様子で声を上げる戒を後目に、咲と賢志はにこやかな雰囲気
で食事を進めた。

昼過ぎからは咲の希望で、三人で山を歩くこととなった。山で山
菜を探ったり、川で釣りをしたりと、夕飯の食材を採取しつつ、咲
は都会では味わうことのできない時間の過ごし方を体験した。

あつという間に三日が過ぎた。

昼食を終えると咲は約束どおり賢志に陶芸を教えてもらうことにな
った。

「まずはこうやって粘土に空気が入らないように……」

動作の一つ一つを実際にやって見せながら丁寧に教えてくれる賢
志のおかげで、咲はテンポよく作業を進めていった。

「少し休憩しようか」

「はい」

咲は手の甲で汗を拭くと、轆轤の前にある椅子に腰掛けた。賢志は
咲の粘土を轆轤に乗せると、咲の隣に座った。

「咲ちゃんには大切な人がいるかい？」

「はい」

咲は賢志の突然の質問に一瞬目を丸くしたが、すぐさま自信に満ち
た表情で答えた。

「作品は心を表す。咲ちゃんもその人のことを想いながら作ると、きつといい作品ができるよ」

賢志は白いシートに覆われた戒の作品を哀しそうに見つめた。

「はい」

咲もまた哀しげな表情でその作品を見上げると、賢志に向かって天使のような笑顔で応えた。すると、二人は黙ったまま、穏やかな雰囲気の中、続きを始めた。

夕陽が離れに差し込む頃、咲は三つもの器を完成させた。

「お疲れ様」

賢志は咲の作品を炉に入れると、離れにある湯飲みにお茶を入れ、くたびれた様子でうな垂れる咲に手渡した。

「ありがとうございます」

咲は湯飲みを受け取ると、湯飲みに映った自分の姿を静かに見つめた。

「何か話しづらいこと、聞きづらいことでもあるのかな？」

離れに入ってからからの咲の様子がいつもと違うことを感じ取り、賢志は穏やかな表情で咲に尋ねた。

「先にも言ったが、作品は心を表す。咲ちゃんの陶器も例外ではないのだよ」

咲はうつむき、哀しい表情を浮かべていた。

「どうして愛する人の彫刻に鎖が巻きつけられているんですか？」

それに錠までついて。何だか可哀想……」

「さあ、ある日突然に戒のやつが巻きつけたのさ。彫刻が人目に触れることを避けたのか、あるいは戒自身が彫刻の目に触れることを恐れたのか。……戒自身しかわからないよ」

咲はうつむいたまま賢志の話を聞いた。そして、静かに顔を上げると戒の作った彫刻を見つめた。

「あれを見せていただけませんか？ お兄ちゃんの愛した人、いえ、愛している人の姿を見たいんです」

咲は強い眼で賢志に願い出た。

「すまない、咲ちゃん。錠が錆び付いてしまっていて、もう鎖を外すことができないんだよ。中の状態がわからないから、無理に外すこともできない」

賢志から良い返事をもらえなかった咲は落胆の色を示した。

咲はため息をつき、ゆっくりと腰を上げると彫刻に歩み寄った。

そして、彫刻に優しく触れた。

「さあ、戻ろう」

賢志は咲の肩をポンツと叩き、離れを出て行った。

咲が小さくうなずくと、土台に文字が刻まれているのを見つけた。

「A・N？ 名前のイニシャルかな？ A、アキ、アユミ、アイ

……哀」

咲は急いで賢志の後を追った。

「あの、せめて彼女の名前だけでも教えてもらえませんか？」

咲は声を張り上げて賢志の背中に問いかけた。しかし、賢志は立ち止まったが、黙ったまま振り返ろうとはしなかった。

「哀という名前ではないんですか？ 私、何故だかよく彼女の夢を見るんです」

必死に問いかける咲の想いに押されたのか、締まった顔つきでゆっくりと振り返ると、

「中村哀。それが彼女の名前だよ。私が話したこと、戒には内緒にしといておくれ」

と、一言告げて母屋へと歩いていった。

(……哀さん、ここにいたのね。やっと見つけた)

咲はその場に立ち尽くすと、気を負いながら歩いてゆく賢志の背中を黙って見つめた。

それから咲は何も聞かなかったかのように、いつもどおりに二人と接した。

「明日で夏休みも終わりか。お兄ちゃん、明日は何時くらいに帰るの？」

「そうだな。昼に親父と出かける用事があるけれど、それでも夕方にはここを出ようと思っている」

戒が暗い調子で言うと、何やら重い空気が辺りを包んだ。

「なあに、また来ればいいさ」

朝食を終え、お茶を運んできた賢志が笑顔で言うと、

「ですよね」

咲は笑顔で応えた。

「じゃあ、今日は三人で山を歩きましょう」

咲は二人の様子を窺いつつ、続けて言った。

「今日もの間違いだろう。たまには家でゆっくりしよう」

戒は賢志からお茶を受け取ると、一口すすり一息ついた。

「お前は運動しなさ過ぎるんだよ。咲ちゃん、おじさんと二人つきりで出掛けようか？」

「はい」

二人の会話を聞いた戒は少々ムツとした表情を浮かべた。

「わかった。行ってやる」

戒は何やら威張った口調で答えた。

昼食を終えると、三人は山へと出掛けた。

咲たちは山頂まで行くと、目の前に広がる景色を眺めた。

(ここ数ヶ月で色々なことがあったなあ)

咲は鳴海が亡くなってから今までのことを思い返した。ふと隣を見ると、二人も各々の想いを巡らせているように見えた。

三人はそこから見える景色を楽しむと川を沿って降りてきた。

「咲ちゃんたちが来てくれたおかげで、今年の夏は楽しかったよ」

賢志は川を眺めながらしみじみ話し始めた。

「そんなに寂しそうに言わないでください。また来ますよ」

咲は白いコートをなびかせながら、葉で作った船を川に浮かべると、その船はゆっくりと流れていった。

「すまないな、親父」

「構わないさ。お前が息子でよかったと思っているよ」

咲は二人が染み入った話をし始めたため、何やら重い空気が流れ出したのを感じた。すると、その雰囲気を変えるため突然川の中へと入っていった。

「おい、咲。お前が次々着替えたおかげで、その服は明日も着ないといけないんだ。転んで濡らしたりするなよ」

「大丈夫。そんなにドジじゃないよ」

咲はいつものように満面笑みを浮かべると、軽い足取りで川の中を歩いていった。

「……いい娘だな」

「ああ。あいつは天使だよ。……無理に留めてはいけなかったんだ。あいつは」

戒は咲に背を向けた。堪えることができない涙を咲に見られないようにするためである。

（お兄ちゃん？）

咲は二人の様子、特に戒の様子がいつもと違うことに気づいており、心に不安を抱いていた。

「二人とも、いつまでも深刻な顔してしないで、こっちにおいでよ」

咲は両手を振って飛び跳ねると、川の流れに足をとられて転んでしまった。

「咲ちゃん」

涙を拭っていた戒は賢志の声を聞いて振り向くと、水浸しになっている咲の姿が目に入った。

「咲」

戒は慌てて駆け寄ると、

「だから言っただろう。明日は何を着るつもりだ？」

川の中で尻餅をついている咲の頭を軽く叩いた。

「いいもん、家の中ではパジャマを着るし、帰るときは来るときに着てきた制服を着るから」

咲は戒の手を掴むとゆっくりと立ち上がった。

「さあ、陽も傾いてきたことだし、風邪をひかないうちに帰ろう」

戒は咲の肩を抱えると、転ばないように足元を確かめながらゆつくりと川から出た。

陽が傾き始めると、三人はその景色に圧されるように黙ったまま山を降りていった。

「さようなら」

二人の後方があるいていた咲は急に立ち止まると、夕陽に染まる木々を眺め、静かに山に別れを告げた。

「咲、早く帰って着替えないと風邪ひくよ」

その様子を黙って見つめていた戒は、大きく手招きをして咲を呼んだ。

「はい」

しかし、言葉とは裏腹に二人は山との別れを惜しむかのようにゆつくりと歩きながら母屋へと戻っていった。そして、咲は山で過ごす最後の一日を名残惜しくも過ごしていった。

夏休み最後の日、咲は朝から帰りの支度を整え、制服に着替えた。そして、離れへと向かうと、シーツに覆われた哀の彫刻の前で立ち尽くしていた。

「哀さん、あなたはどつという人なのかな？　せめて顔だけでも見たいな」

昼もまだ過ぎぬ頃、しばらく離れにいた咲は一人つぶやくと、戒たちが出掛けていることを思い出した。

（そうだ、お兄ちゃんの部屋に行けば写真か何かあるかもしれない）
すると、咲はすぐさま母屋に戻り、家内に誰もいないことを確認すると、戒の部屋へと向かった。

（アルバムだ）

咲は戒の机の上にあるアルバムを手に取ると、躊躇うことなく開いてみせた。しかし、哀らしき人物の姿は見つけられなかった。

（あれ、おかしいな。最愛の人の写真、ないわけがないのに）

それから机の中やふすまの中など一通り部屋を探したが、咲は

ついに見つけることができなかつた。

「捨てたのかな？」

咲は仕方なくあきらめて部屋を出ようとしたとき、

『そんなところではすぐに見つかつてしまつたらう？』

戒の部屋から誰かの声がした。咲が慌てて振り返ると、夕陽が差し込むセピア色の部屋の中、ぼんやりと高校の制服を着た男女の姿が見えた。

『大切なものはこういうところに隠さない』

男はふすまの上に登ると、天井の一角を開けてみせた。すると、自慢気に笑う男を見て、

『そんなところに何を隠すのかな？ エツチな本とかテストの答案とか？』

女は声を上げて笑いながら男をからかつた。

『ばか、そんなものじゃないよ。……そうだな、大切な思い出とか。この気持ちとか形のないものも一緒に、忘れないようにね』
二人は静かに寄り添うと、優しく口付けを交わした。そんな二人の頬を夕陽は赤く染めた。

ふと我に返つた咲は、再度部屋の中へと足を進めた。そして、ふすまに登ると恐る恐る天井の一角を開けた。

「何かある。本かな？」

咲はそれを手に取ると、ゆっくりと降りてきた。咲が手に取つたのは随分古びた本であり、表紙の文字は掠れて読めなくなつていた。

（ん、何か挟んである）

咲はしおりのようなものが挟んであるページを開いた。すると、よく使われているのか、そのページはボロボロになつていた。

「タイトルは『黄泉ガエリ』？ あれ、本に挟んであるの手紙だしおり代わりに使われていたものは、くしゃくしゃになつている手紙であり、差出人が中村哀となつていた。

咲はしばらく封を眺めた後、悩み迷いながらも読んでみることにした。

『愛する戒へ、

あなたがこの手紙を読むときには私はこの世を去っているでしょう。先立つことを許してください。私たちを蔑む人たちを殺そうとしているあなたを、私の声すらほとんど届かなくなってしまうたあなたを正気に戻す手段を、あなたを殺める以外にはこの方法しか思いつかなかったのです。私は祖父のような苦しみには耐えられそうにありません。大切な人を殺人者にしてしまう過ちに耐えることはできそうにありません。だから、さようなら。でも、忘れないで。ずっと、私はあなたの傍にいるから。

願わくはあなたが先に手紙を読んで思い止まってくれることを祈って 哀』

手紙から切なさがかみ上げ、涙が咲の頬を真つ直ぐ伝った。手紙には写真が同封されており、その写真には笑顔で肩を寄り添う二人の姿があった。

「これが哀さん？」

写真に写っている哀の姿が夢で見た通り自分に瓜二つであり、咲は驚きを隠しきれなかった。そして、次の瞬間いつものように記憶が咲の頭を駆け巡った。

公園には顔中にあざを作った男子高生と彼の顔に濡れタオルを当てる女子高生の姿があった。

『どうして俺たちばかりひどい目に遭わされなければいけないんだ。俺があいつらに何をした？ 君は俺を庇ってくれただけじゃないか。それなのにかかわれ、殴られ……』

『彼らに理由なんかはないのよ。たぶん、誰でもよかったの。放っておこう。卒業するまで後一年足らず。それまでの辛抱よ』

女子高生は歯を食いしばりうつむく男子高生の顔を両手で優しく持ち上げると、優しく微笑んだ。

『悪いことをしている人間が平然と生きていることを許せと？ 俺にはできない』

いつもの優しく穏やかな表情とは打って変わり、満面に憎悪を浮かべるその表情に女子高生は身を震わせた。そして、しばらく沈黙が続いた後、

『そうだ、呪い殺せばいいんだ。君が話してくれた黒魔術、あれなら罪にならない。悪を排除して俺たちの平穏を取り戻すんだ。待っていて、哀』

男子高生はゆっくりと立ち上がると、覚束ない足取りで公園を出て行った。

『待つて、戒。祖父が言っていた。黒魔術は自然の摂理を歪める行為、その修復のためには用いた者に災いが降りかかる』

恐怖で腰を抜かし、その場に座り込んだ哀は、戒を止めようと必死に名を呼んだ。しかし、戒は振り返ることなく公園を後にした。

哀は戒に黒魔術の話をしたことを深く悔いた。それと同時に祖父が犯した過ちと同じことが起こるのではないかと、不安で眠れない日々が続いた。

ある日、哀は戒の部屋に入ったとき、黒魔術の儀式に使われる小刀を目にした。哀は慌ててそれを離れの一つに隠した。

『よし。彫刻もようやく完成したよ、哀』

『うん、これでいつでも私に逢えるね』

戒は哀が心なしに寂しげな表情を浮かべたのを感じた。

『ばか、哀はこの世で唯一の存在だよ。こんな石の塊に代わりができるものか』

戒は相変わらず黒魔術について熱心に調べているようだが、哀の前ではいつもどおりの穏やかな表情を見せた。

哀は、本当は誰よりも優しい戒を失わないように、戒が取り返しのつかないことをする前にいじめ自体を終わらせようと、職員にいじめの実態を説明した。そして、クラスの皆に呼びかけた。しかし、そのことがきっかけで、哀は帰り道で酷いいじめを受けた。

『つらい。戒さえ傍にいてくれたら、いじめなんか耐えられるのに、私は幸せなのに。お願い、戒。自分を見失わないで』

哀は一旦学校に戻ると、濡らしたハンカチで顔を押さえた。そして、制服を着たまま哀の足は自然と彼の家に向かった。

戒の家に着くと、哀は離れにある戒が心を込めて作ってくれた彫刻を静かに眺めた。すると、哀が離れに入るのを部屋から見ていた戒が、様子を見にやってきた。

『哀、その顔？』

顔にあざを作っている哀の姿を見て戒は一瞬言葉を失った。

『あいつら、もう許さない。魔術なんてくそ食らえだ。この手で殺してやる』

形相が見る見る変わっていき、離れを飛び出そうとする戒を哀は後ろから強く抱きしめた。

『止めよう。二人で転校すればいいじゃない。高校なんて辞めて、二人で働いたって構わない。あなたが傍にいてくれれば……』

哀は涙を流しながら必死に戒を止めた。戒はしばらくうつむき、何かを考えていた。しかし、戒は哀の手を優しく振り払うと、黙ったまま出て行ってしまった。

哀はしばらくの間その場に泣き崩れ、一通り泣きつくすと、すっかりした顔を浮かべて静かに彫刻を見上げた。

（やっぱりこうなっちゃったか。もう、これしか手がないの。彼のことよろしくね）

哀は離れにある湯飲みを入れておく棚の裏から、戒の小刀を取り出した。

戒は学校に到着すると、息を切らしながらも校舎の中に入っていた。そして、土足のまま下駄箱前を通過しようとしたとき、自分の下駄箱に手紙が入っていることに気がついた。

（どうせ嫌がらせか、呼び出しだろう）

戒は手紙の裏を見て差出人を確認した。差出人が哀であり、紛れもなく哀の筆跡であることを確認すると、戒は警戒しつつ手紙を開い

た。

『愛する戒へ、』

あなたがこの手紙を読むときには私はこの世を去っているでしょう。先立つことを許してください。私たちを蔑む人たちを殺そうとしているあなたを、私の声すらほとんど届かなくなってしまうあなたを正気に戻す手段を、あなたを殺める以外にはこの方法しか思いつかなかったのです。私は祖父のような苦しみには耐えられそうにありません。大切な人を殺人者にしてしまう過ちに耐えることはできそうにありません。だから、さようなら。でも、忘れないで。ずっと、私はあなたの傍にいるから。

願わくはあなたが先に手紙を読んで思い止まってくれることを祈って 哀』

戒は肩で息をしながら手紙を読むと、慌てた様子で家へと引き返した。

(哀、待ってくれ)

戒は涙を溢しながら、手紙が風で飛ばないようにしっかりと握り締め、全力で家へと向かった。そして、家に到着するとすぐさま離れへと向かった。

『哀』

離れに入った瞬間、戒の目に入ったのは哀が左手首を切って彫刻にもたれ掛かっている姿であった。

戒は哀に駆け寄るとポロポロと涙を溢しながら、哀の身体を揺すって何度も名前を呼んだ。

『よかった。いつもの戒だ』

『どうして、本当に死ぬ必要なんてないだろう？』

戒は必死に傷口を押さえたが、出血がひどく止まることはなかった。『救急車を呼んでくる』

戒が立ち上がると、哀は傷ついていない右手で戒の手を掴み、首を

横に振った。

『もう、間に合わないよ。私、バカだよ。本気で命を懸けていることを見せないといけないと思っただ。そうしないと、戒は何度も彼らを殺そうと考えるんじゃないかって、そのうち私の声が全く聞こえなくなるんじゃないかって、そう思っただ』

哀が涙を溢しながら必死に言う、戒は一人では身体を支えることができなくなつた哀の身体を抱きかかえた。

『本当にバカだよ。……でも、俺が一番バカだ。もっと早く気づくべきだった。君が傍にいればそれでよかったのに……』

戒の表情を見て、哀は安堵の表情を浮かべた。

(いつもの戒だ。もう、大丈夫だよ)

哀は戒の涙を拭くと、満面に笑顔を見せた。天使のようなその笑顔に戒はつられて笑顔になった。

『私、傍にいるから。……大好きだよ、戒』

静かに息を引き取る哀を強く抱きしめて、戒は哀の名を必死に呼んだ。しかし、どんなに力強く叫んでも言葉にならなかった。

(哀、アイ)

戒が哀を抱きしめたまま空を仰ぐと、そこには笑顔の哀の姿があった。

(傍にいるから)

その声は彫刻から聞こえてきたような気がした。

『ああ、忘れない』

戒は哀の髪を掻き上げると安らかな表情で眠っている哀に、約束の意を込めて優しく口付けを交わした。

八年後、哀の視線の先には黒いコートを羽織った戒の姿があった。君の笑顔を見る方法を見つけたよ。君は許してくれないかもしれないね。でも……』

戒は言葉を詰まらせると、それ以上は何も言わずに彫刻にシートを被せた。そして、誰の目にも触れないようにと鎖を巻きつけた。

咲が正気に戻ると全身に力が入らず、その場にうな垂れた。すると、咲は自分の左手首から血が流れていることに気がついた。

（どういうこと？ この血は何？ 哀さんと私は瓜二つだった。それに哀さんの『私はあなた』という言葉。どういう意味？ 私は誰？ 私は哀？ もう何もわからない）

咲は精神的な疲労から何も考えられなくなっていた。

「あの後、彫刻にシーツを掛けてから、お兄ちゃんは何をしたのだから？」

「知りたいか？ 知りたいなら全てを話そう」

いつの間にか家に戻ってきていた戒は部屋の前に立って、うな垂れる咲に問いかけた。すると、咲は慌てて身体を起こすと怯えた表情で後ずさりした。

「大丈夫だよ。何もしない。できるわけがない」

いつものように優しく微笑む戒を見て安心したのか、咲はきちんと座りなおすと、

「聞かせて欲しい」

戒の目を真っ直ぐ見て答えた。その勇ましい咲の表情はいじめられている自分をかばってくれた哀の表情と重なった。

「場所を変えよう。外へ出るから上を羽織っておいで」

戒はそう言うと一人階段を降りていった。咲は一旦自分の部屋に戻り、白いコートを羽織ると、急いで戒の後を追った。

黄泉ガエリ

咲は戒の後について森の中へと入っていった。

「お兄ちゃん、どこまで行くの？」

黙ったまま森の置く深くへと進んでゆく戒を警戒しつつ咲が尋ねると、

「もうすぐだよ」

戒は足を止めて振り返り、いつものように優しく微笑みかけた。そして、咲が小さくうなづくのを見ると、再び黙ったまま歩き始めた。しばらく歩くと、森の中に少し拓けた場所へと行き着いた。地面には奇妙な模様が描かれており、戒はその中心に咲を誘導すると、哀しげな表情でしばらく空を仰いだ。そして、戒はすべてを打ち明ける覚悟を決めると、腰元から小刀を取り出して、黙ったまま咲に手渡した。

(こ、これ。もしかして…… うっ)

咲は小刀を手にした瞬間、頭が割れるようなひどい頭痛に見舞われた。

「そう、君が自らの命を絶ったものだよ」

戒は咲が頭を抱えてうずくまるのを哀しげな瞳で見つめながら話し始めた。

「違う色の絵の具が混ざるような感覚かな？ 咲の記憶に哀の記憶が注ぎ込まれているだろう。催眠療法の応用で君がこの刀を手にすると、二人を隔てていた障壁がくずれるようにしてある」

何とか頭痛が治まると、咲はその場に座り込んで戒を憐れむ様に見つめた。

「始まりは、西脇ひさしがカウンセリングに来たことだった。彼はクローンを作ったことを非人道的行為とされて社会追放され、苦しんでいた。カウンセリングが進み、彼が立ち直る頃、俺は君のクローンを作るよう依頼した。すると、彼は喜んで依頼を受けたよ。彼

はずぐさま、十年前のクローン実験で資金援助をしていた政治家里山祐貴に連絡をして、再度資金を出させた」

「お父さんを巻き込んだのはなぜ？」

咲が今にも泣き出しそうな表情で尋ねると、

「今回の計画には哀のDNAと医者が必要だった。鳴海さんは俺と哀のことは知っていたからね。哀の肉体を蘇らせたなら、同情して協力してくれた。哀の方のお父さんは哀の髪の毛を持っていたから、それを提供してもらった」

戒は遠くを見つめ、決して哀の顔を見なかった。自分のしたことが許されることではないとわかっており、哀の顔を直視できなくなっていたのである。

「君の身体をクローン技術で蘇らせた後、黒魔術で君の魂を黄泉返らせた。そして、俺が君の記憶を作り換えた。その記憶は君が一番よく知っているね。施設で育ち、時々俺と遊んだという咲の記憶だよ」

哀もまた戒を責めることはなかった。彼は気が振れて、我を忘れて今回のことを行ったのではなく、理性で非人道性を認識し、苦しんでいたことに気づいていたからである。哀はただ黙って話を聞いた。「君は川本咲として第二の人生を歩き出す予定だった。高校卒業し、大学進学、卒業、結婚……君の幸せを、君の笑顔を遠くから眺めているつもりだった。それで十分だった。しかし、事件が起こってしまった」

戒は哀の憐れむような眼に触れることを苦痛に感じ、ゆっくりと哀の後ろへと回った。

「川本鳴海を殺害したのは君のお父さん、中村真也だ。……それによって君を留めておく黒魔術の呪縛のバランスが崩れた」

戒の言葉を聞いて哀は目を泳がせた。

「どうして、お父さんが？人を殺せるような人ではなかったのに」哀は眉間にしわを寄せると、悔しそうな表情で戒に尋ねた。

「君のお母さんは、君が亡くなってすぐに後を追った。それからお

父さんはずっと孤独の中で生きてきたんだ。そんな中、娘が生き返った。当然彼は君を引き取りたいと願い出たが、俺と鳴海さんは記憶が呼び戻されることを恐れて許可しなかった。それで……」

「それで、鳴海さんを殺して取り戻そうとした？」

風が強く吹き始め、雲の流れが早くなつた。哀はうつむきながら白いコートが飛んでゆかないように手で押さえた。

「哀のほう詳しいだろうが、黒魔術には悪魔との契約が必要となる。哀を黄泉返らせると同時に奴にも呪縛をかけたため、バランスが保たれているうちは問題なかった。しかし、鳴海さんの死で奴は動けるようになってしまった」

哀はふと戒がリビングで、また、沖縄で誰かと話している姿を思い出した。

「奴が呼び出した人間を殺すだけで満足すれば、俺の命を差し出して終わりだった。しかし、奴は一番に君の魂を望んだ」

戒はこぼれ落ちそうな涙を堪えるべく、歯を食いしばり、空を見上げた。

しばらく沈黙が続いた後、

「俺は奴に君を渡さないため、すべての鎖を解き放ち、在るべき場所に還すため、白魔術『黄泉還り』を行うことにした。君のお父さんと西脇を殺害したのはこの俺だよ」

戒は静かに語った。

哀は突然に、紛れもなく自分の最愛の人が父親を殺害したという事実を知らされて、大粒の涙を溢し始めた。

「四人目は？ 私たちは沖縄にいたのに」

「あれは親父に頼んでもらったことだよ。黒魔術をかける俺を除いて五芳星を完成させるためにはもう一人必要だった。最初は猛反対を受けたが、最終的には他の誰かを巻き込むくらいならと協力してくれた。そして、哀を還し、全てを終わりにするために、里山さんを殺害してもらった」

突風が吹き、辺りが突然黒い影で覆われると、地面に描かれてい

た模様が何やら光りを帯び始めた。すると、哀は目の前に夢で現れた悪魔の姿を見た。

「大丈夫。奴はこれ以上近寄れないから」

戒は優しい声色で哀に言うと、静かにうつむいた。

「何が起こっているの？」

哀は振り返り、戒の顔を見ると怯えた表情で尋ねた。

「五芳星の呪縛が解けたんだよ。……親父が息を引き取った。そして、同時に白魔術の術式が完成した」

戒は涙を溢しながら声を押し殺して答えた。

「どうしてこんなことをしたの？ 大切な人を犠牲にして」

「君の声が聞きたかった。笑顔が見たかった。君に、君の温もりを、君を見失うことが怖かったんだ」

戒は言葉を詰まらせながらも、必死に言葉にならない想いを紡いだ。そして、その場で膝を付く戒を哀は優しく受け止めた。

「いつも傍にいたじゃない。それなのにあなたはシーツなんか被せてしまった」

哀は膝の上で泣きじゃくる戒の頭に額を乗せた。

「彫刻にこんな温もりはないだろう？」

「あるよ。……少なくとも、昔のあなたならあれを見ただけで私を感じてくれた。そんなあなただからこそ、残して逝けたの」

哀は戒の顔を起こすと、優しく抱きしめた。すると、戒はまるで母親に泣きつく子供のように哀の胸の中で涙を流した。

（いつからだろう？ 俺は既に君を見失っていたんだね）

しばらくの間、戒は哀の温もりに浸った。そして、覚悟を決めると哀の足元に置いてある小刀を手に取り、哀に手渡した。

「私が悪魔に身を捧げたら、あなたは犠牲にならずに済むんでしょっ？」

「いや、奴の最大の目的は術をかけた俺が苦しむ姿を見ることだ。

第一に君を狙ったのはそのためだよ。後々殺されることになるだろう」

戒は哀の手を握り、刃を左胸に当てると、いつもの優しく穏やかな表情で微笑んだ。

「黄泉還りを行うためには、呪いをかけられた者がその手で術者を殺めなければならぬ」

冷静に話す戒の言葉を聞いた哀は涙を流しながら必死に手を引きながら首を横に振った。

「どうしてもっと早く気がつかなかったの？時間は戻らないんだよ」

「……ああ、そうだね。哀が教えてくれた、『黒魔術は自然の摂理を歪める行為、その修復のためには用いた者に災いが降りかかる』というおじいさんの言葉、俺はこの命を賭して修復しないとイケない」

終始穏やかな表情を浮かべる戒を見て、哀は覚悟を決めた。そして、哀は優しく微笑み、小さくうなずくと、ゆっくりと小刀を戒の胸に突き刺していった。戒は哀を強く抱きしめると、

「二人はまた巡り逢えるかな？」

哀の耳元で囁いた。

「当たり前でしょ。二人が巡り逢うのは摂理の中の出来事だよ」

哀が涙を流しながらも笑いながら答えると、戒もまた声を上げて笑った。

「……先に逝くよ」

「……うん」

戒の呼吸が止まるのを感じると、哀は戒の身体を強く抱きしめた。「私はバカだ。わずかな時でも最愛の人が先に逝くことが、これほどまで辛いなんて。ごめんね、戒。ごめんね」

戒の安らかな亡き骸を抱え、哀は涙を溢れさせた。すると、哀の身体は光を帯び始めた。

「すぐに逝くよ、戒」

哀は戒を強く抱きしめ、天使のような満面笑みを贈った。すると、同時に哀の身体はみるみる灰になっていった。その場には白いコートだけが残され、それは優しく戒の身体を包んだ。

戒が息を引き取ると同時に彫刻を覆っていた鎖が崩れ、風に吹かれてシートが舞った。

「これは……」

調べを進めてその場に来ていた北島は、まるで聖母の様なその表情に言葉を失った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6960c/>

黄泉ガエリ

2010年10月21日13時40分発行